

HUGっと！プリキュア 鬼人の夢想曲

水無月 双葉(失語症)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ありがちな作品内転生ものです。

仮面ライダー響鬼の能力を得てプリキュアの世界でプリキュア達と共闘します。

かなりの拡大解釈とご都合主義により話が展開します。

目次

第1話 別れと出会い

新たな戦い

響の想い

キュアエール

第2話 守護天使

八雲とはぐたん

苛立つ八雲

薬師寺さあや

エールとさあやと獣鬼

アンジユの鵬翼

第3話 泣くのは赤ちゃんのお仕事です

よ

輝木ほまれ

はなの母

ハリーと八雲

野乃一家と

第4話 星朧

新しい生活に

ほまれとバスケット

ビューティーハリーにて

雲散霧消

第5話 心の傷を星に……

ほまれのセンス

オーブン大成功

公園で

41

44

50

57

63

69

76

85

93

98

102

102

ディスクアニマル

—

109

ほまれと八雲

—

113

呼び方

—

120

第1話 別れと出会い

新たな戦い

嫌な夢を見る、静まり返る世界、止まっている時間、そして聞こえる赤ん坊の泣き声

……

夜中に目が覚め全身が汗まみれになっている。

何より俺を焦燥させたのは石の様になってしまった響ちゃんとなつちちゃんの姿だった。

「またこの夢か……あの世界は……あの赤ん坊の泣き声は……」

キッチンに移動し水を一杯飲む、窓に目をやるとカーテンの隙間から朝日が入ってきている。

「どうするべきか……」

俺は虚空を見つめ呟いた。

「八雲兄聞いてる？」

響ちゃんが咎めるような声に我に帰る、顔を向けると頬を膨らましてジト目で見上げていた。

「ごめん、ごめん、ちよつと考え事してた」

「八雲さん、少し顔色が悪い気がしますけど、何かありました？」

「心配ごとなら相談に乗るわ」

奏ちゃんとセイレーンも心配そうに見て来る、俺は後頭部を掻きながら3人に話をしようと思悟を決める。

「話をするからさ、皆の都合のつく時に家で話そう」

「赤ちゃんの泣き声？」

「静止する世界って……」

響ちやんと奏ちやんが眉を寄せ顔を見合わせセイレーンとアコちゃんは渋い顔をしてる。

「でな、少し調べてみようかと思う」

「ヤクモまさか1人で行く気？」

俺の言葉にセイレーンが咎める様に聞いてくる、思わず視線を外し目の前のカップを眺めた。

「八雲兄？」

響ちやんが泣きそうな声で尋ねてくるが、俺は目を瞑り何とか言葉を紡ぐ。

「皆、ごめん」

「ごめんじゃないよ！ 八雲兄！」

「そうですよ！ 何で1人で行くんですか！」

「私達は仲間なんですよ！」

「3人ともうるさい、八雲、みんな怒っているんだよ、ちゃんと説明してよ」

俺はテーブルの上で手を組みながら1人1人ゆつくりと見渡す。

「まずは泣き声の調査になる、戦いになるか分らないし、何より皆は学校があるだろう加音町で戦うって訳じゃないんだ」

取って付けた様な言い訳をする自分が嫌になる、アコちゃんが鋭い視線で睨み付けてきた。

「今までだって、色々な所で戦ったじゃん、何で今回はダメなの」

響ちゃんの咎めるの様な声色に胸が苦しくなる。

「だから、まだ戦いになるか分らないって言ったよ、仮に戦いになって長期間になったらどうするの？ 響ちゃん、ピアノストの夢と戦いを天秤にかけちゃ駄目だ、奏ちゃんだってそうだパティシエールになるんだろう？ それにセイレーンはこれからハミイと一緒に幸せのメロディを歌い続けるのだから？ その大切な役目を捨てる気か？ ハミイをまた泣かせるのかよ、アコちゃんはメイジャーランドの次期女王だ、女王に向けての勉強も始まっているだろうが……」

「もういい！ 勝手にいけば良いじゃん！」

アコちゃんがテーブルを叩き、脇目も振らず出て行ってしまい、セイレーンがその後を慌てて追いかけて行く。

「……八雲さん、いつ出発するの？」

「嫌な予感がする、出来るだけ早く出ようと思っている……」

奏ちゃんの問い掛けに少し考えて答えると響ちゃんが大きな溜め息を吐く。

「八雲兄さ、もう出る日決めているんでしよう、はつきり言つてよ」

響ちゃんに顔を向けると頬杖を吐いてそっぽを向いていた。

「……すまない、明日の早朝に加音町を出る」

「うん、分かった。奏帰ろう」

響ちゃんは俺を見る事は無く奏ちゃんの手を引いて帰って行く、その後ろ姿が一瞬石の様に動かなくなつた気がして声を上げそうになつたのを何とか飲み込んだ。

響の想い

早朝、バイクをガレージから出しシャツターを下ろしもう一度家を眺める、色々な事を思い出す、これ以上この場に居たら出れなくなると思いバイクの元に向かう。

「八雲さん、おはよう」

何時も間にか来ていた奏ちちゃんがバイクの側に立っており最後の挨拶に来てくれた、その側にはセイレーンとアコちゃんも居る。

奏ちちゃんと目が合うと悲しそうに顔を横に振った。

「響、来なかった……」

「そうか……」

口の中だけで当り前かと呟く。

「八雲さんいつものバイクじゃ行かないんだ、これって矛盾鬼の時に使っていたバイクですよね？」

俺は矛盾鬼の時使っていたバイクに新たにサイドカーを付けて準備をしていた。

「あのバイクは……他の人を乗せたくない」

俺の言葉に奏ちちゃん達が嬉しそうに笑う、この笑顔をもしばらく見納めかと思うと胸

が苦しくなる、痛みを忘れる為に一度深呼吸して奏ちゃんの側に行くと小さな包みを手渡す。

「コレは……家とバイクの鍵……？」

「この家のね、バイクも車も皆で好きに使って欲しい、セイレーンの部屋もあのままのにしてあるよ」

「八雲……帰ってくるよね、加音町に帰ってくるよね？」

アコちゃんが俺の服の袖を掴み半分泣きながら訊ねてくる、アコちゃんの頭を撫でる。

「この街は俺の第2の故郷だ、戻ってくるよ」

「八雲、約束！ 前みたいに約束して！」

「約束だ、必ず戻ってくる、アコちゃんが女王になる姿もみたいしね、必ず戻る」

アコちゃんは目に涙を溜めながら何度も頷く。

「セイレーン、アコちゃんを頼む」

「任せて、次の大音楽会には一度戻って来て、私とハミイの歌を聴きに来て」

セイレーンに頷きもう一度皆を見渡す、小さく息を吐きバイクの向かう。

「八雲兄い！」

耳に入った声に振り向くと肩で息をしている響ちゃんが立っていた。

「響ちゃん……」

「これ、お守り」

響ちゃんは俺を見ない様に小さな手作りの人形を手渡してくる、その人形はメロディを模しており、あまり上手くは無いが気持ちの大ききさでは何者にも負けていなかった。

「ありがとう、響ちゃん」

顔を上げてくれない響ちゃん、俺は響ちゃんの肩に手を置く。

「顔見せて、響ちゃんお願い」

「八雲……兄……」

ゆつくりと顔を上げる響ちゃん寝不足か泣き腫らしたのか目が赤い、しばらく見つめる。

「必ず、帰ってくる、響ちゃんを1人にはしない、約束する絶対に戻る」

俺の返事に何度も頷く響ちゃん。

「ねえ、八雲兄。私の……ううん、私達の力が必要なら直ぐに呼んで飛んで行くから」

「当てるにしているよ、じゃあそろそろ行くね」

「うん、八雲兄。行ってらっしゃい」

声の導くままにバイクを走らせていくと美しい街並みが見えてくる、遠くには時計塔
見たいな物もあり何となく加音町を連想させ、俺は一度そこで休憩を取ろうと考えハン
ドルを傾けた。

街に着きビジネスホテルで部屋を確保し街並みを見て回る事にする、街の人々も幸せ
そうに生活しており胸の奥が温かくなるのを感じる。

適当に散策しているとネクタイをした制服のグループと何度かすれ違う、年の事は響
ちやん達と同じ位かなと思いつながらぼんやり眺めていると、次々に倒れ出し小さく唸り
だす、直ぐに近場の生徒に駆け寄ると、倒れている生徒たちから黒く少し嫌な気配のす
る粒子が漏れ出していた。

「君！ 大丈夫か！ しっかりしろ！」

「心がトゲトゲする……何もしたくないの……放っておいて……」

明らかにおかしい状況に心の警鐘が鳴り響くと同時に上空に禍々しい気配を感じ空を見上げると墨で塗りつぶした様なまっ黒な雲が渦を巻いていた。

上空の禍々しい雲の渦が激しくなり時計塔を包み込むと怪物に姿を変えてしまう。

「時計塔が……ネガトーンやザケンナー達とも違う見た事無いタイプだと……？」

倒れ小さく呻いている生徒達を見渡す、こんな時響ちやん達ならどうするか、そんな事は決まっている。

「まずはあの敵を叩く、そこからだ」

キユアエール

怪物を目指しひたすら走る、状況が状況だ。かまっていられないと感じた俺は屋根を上を走る事にした。

怪物が何かを攻撃する様に足踏みをし地響きがする、奥歯を噛み締め更に走る速度を上げる。

怪物を射程に捕えた時、足元にはそれを使役しているであろう男と、それに対峙する様に1人の女の子が両手を広げ立ち塞がっている、その女の子の足元には小さな赤ちゃんが泣いており彼女が赤ちゃんの為に立ち塞がっているのは容易に理解出来た。

「ちい、間に合ええ」

肢体に更に力を漲らせ2人を助ける為に俺は飛び出した。

明らかに足元の女の子達を踏みつぶす為の怪物のジャンプに合わせ飛び蹴りを怪物の横っ腹にねじ込む、空中いる状態での予期せぬ一撃に怪物は横に吹き飛ばす。

女の子の側に着地すると、その子に向かい強い口調で声を掛けた。

「早くその子連れて逃げろ！」

「逃げない！……ここで逃げたら格好悪い、そんなの……私のなりたい野乃はなじやない

！」

はなの心からの叫びに答えるかのように彼女の周りに光と力が溢れだす、その光景はまるで……

「心が……溢れる！」

はなの胸から更に光が溢れ美しい水晶が生み出される。

「ミライクリスタル！ ハート・きらつと！」

「は〜ぎゅ〜・ぎゅ〜・ぎゅ〜」

「輝く未来を抱きしめて！ みんなを応援！ 元気のプリキュア！」

「キュアエール！」

溢れ出した光が彼女の周りに集まり野乃はなど名乗った少女はプリキュアに変身した。

余りの光景に俺は言葉を失う、立っていたプリキュア、キュアエールはメロディ達と同じくチアガールの様な恰好をしていたからだ。

「めっちゃイケてる！」

「プリキュア……キュア……エール……」

エールの第一声に力が抜けそうになるが対峙していた男は明らかに狼狽をしており気になる言葉を発していた。

「2人まとめて、叩き潰してくれ！ 行け！ オシマイダー」

「黙れ！」

気合を入れ言葉に力を込め相手に叩きつける、身をすくめる謎の男。

「お前の目的なんてどうでもいい、だが、無関係な人々を襲い年端もいかない赤子をも手にかけてしようとす！ 絶対に許さない！」

「許さなければどうする！ プリキュアでも無いお前が何が出来るってんだ！」
騒ぐ男に対してホルダーから音角を取り出し展開させ胸の前で構える。

「戦う力はプリキュアだけじゃない、見せてやる……俺の力を！ 鬼人解放！」

音角を弾くと周りに澄んだ美しい音が響き渡り俺の体を炎が包み鬼へと変える。

「鬼姫の使者！ 音撃戦鬼！ 獣鬼！」

「鬼人？ 鬼？ へ……」

後ろで驚くエールに対し少しだけ顔を向けて話をする。

「大丈夫、俺は味方だキュアエール、今は目の前の敵を倒す！」

オシマイダーがジャンプをし、その針で出来た拳を振り落としてくる、俺は一步前に出ると右腕で受け止め攻撃を防ぐ、空いた腕で攻撃を仕掛けてくるがその攻撃はエールが苦も無く受け止める。

エールと頷き合い腕を掴んだまま同時に高くジャンプしオシマイダーを地面に叩き

つけた。

エールの気合が充実しているのが分かる。

「行け！ エール！」

エールの腕の飾りが手に移動するとエールの挙動が始まる。

「フレ！ フレ！ ハート・フォーユー！」

腕を大きく振り大きなハートを作るエール。

エールの合図でピンク色のハートは打ち出され時計塔の怪物を包み込むと浄化させた。

エールが慌てて側にいた赤ちゃんを大切そうに抱きしめると、側にいたネズミの様な生き物の側に置いてあったケースが開きピンク色のスプーンがエールの手元に渡され

るとミライクリスタルがセットされそこから光が溢れ赤ちゃんに注がれる。

「ミライクリスタルはアスパワワの結晶、はぐたんにパワーを上げるんはプリキュアにしか出来へん」

赤ちゃんはどうかやはぐたんと言うらしいが、そのはぐたんが機嫌良く笑うとエールも笑顔を見せる。

「はぐたんにアスパワワを与えてもまだミライクリスタルが光つとる、こいつの心にはどんだけのアスパワワがあるんや……これなら未来も……」

1人で驚愕しているネズミみたいな生き物の呟きから何となく状況が読めてくる、少し目線をそらし考えているとはぐたんが俺に手を伸ばそうとしているのが見える。

「はぐたんだけ？ 笑っているけど俺の事怖くは無いのかね？」

はぐたんの顔を覗き込むとご機嫌で笑う、その笑顔に俺も何となく笑ってしまうがはぐたんが俺の顔に手を伸ばす。

「……あの……はぐたん、ツノ離して貰っても良い？ お願い引つ張らないで取れないから、ツノ取れないからあ」

第2話 守護天使

八雲とはぐたん

「格好良かったよね〜」

教壇の上の花瓶に花を生けている時に耳に入った楽しそうな声に思わず振り向いてしまう。

男女4人が昨日の怪物の話で盛り上がっていた。

「元気のプリキュア、キュアエール」

「あと鬼姫の使者、獣鬼」

「どっちも、素敵だった〜」

「本当？　ありがとう、あ……えっと、ありがとうって私も言いたいあのプリキュアさんと使者さんに」

「謎の怪物から皆を助けたんだもん」

「最高にイケてるよ」

クラスメイトの会話、何気ない会話、でも私の心は少しざわめいた。

放課後急いではぐたんの所に向かう、ネズミに指定されたのは小さな池のある広場。
「はぐたんおまたせ〜」

優しくはぐたんを抱きしめる、柔らかい感触と温かな体温、自然と笑顔になる。

「(ハハ)は〜」

「(ハハ)はな、俺らの家や!」

何言ってるんだろうこのネズミ、池を覗き込むと水面に映る私とはぐたん水面に映るはぐたんも可愛い、ネズミがケースを空けながらやたらと自慢げにしている。

「はな、ミライクリスタルだし」

「ネズミなのに偉そー」

「ネズミちやう言うてるやろ、ハリハムハリーや」

オムツを替えるとはぐたんは途端にご機嫌になつて笑い出す、その笑顔にホッと一息をつく。

「ねえ、ハリー質問。あの怪物は何なの？」

ハリーがテーブルに腰を掛けて辛そうに話し出す。

「あれはオシマイダー、クライアス社の生み出した化け物や、俺らの世界を滅茶苦茶にした悪者や、奴らはミライクリスタルと狙つとる、みんなの元気パワー、明日への希望のパワーがアスパワワその結晶がミライクリスタルや、それが奪われたら世界から未来が無くなる……」

「未来が無くなる……つてどういう事？」

ハリーの説明が上手く理解できない、未来つて無くなるのどう言う事分らないよ。

「時間が止まる、静寂の世界、喜びも悲しみも何もない無の世界……で、良いのかな？」

入口からいきなり掛けられた声に私とハリーは慌てて顔を向けるとそこには1人の男性が立っていた。

「誰……?」

「何者や! おまえ」

青銀色の髪と銀色の瞳の男性、ハリーと同じぐらいのその人は、優しく笑っていた。

「忘れたかい? 野乃はなさん。いやキュアエール、昨日一緒に戦っただろう」

「あつ、昨日の使者さん?」

ハリーが険しい顔で使者さんを睨みつける。

「……ああ、お前あのネズミもどきか」

「ネズミちやう、ハリハムハリーや」

使者さんは小さく「そうか」と言うと言と簡単に受け入れる、なんか凄い。

「まあええ、何しに来たんや」

ハリーの問い掛けに使者さんは私を指さす。

「ええ? 私?」

「違う、その子に、はぐたんに呼ばれた」

「はあ?」

苛立つ八雲

「じゃあ何、木野さんはその夢だけを信じてはぐぐみ市まで来たの？」

「それもあるけど、前住んでいた街に霧囲気が少し似てたつてもあるし……」

「それだけじゃ信じられへんな」

木野さんの説明に納得がいかないハリーはずっと渋い顔をしている。

「そうか……ふむ」

瞳を閉じ考え込む木野さん、小さく息を吐くと目を開き窓を見つめる。

「時間……」

「時間？」

木野さんの呟きに思わず聞き返す。

「ああ、止まったんだよ、一度な、その時に聞こえた赤ちゃんの泣き声と夢の泣き声が一緒だった、それで確信したんだ何かあるとね、だから住んでいた街を出た、信頼しろとは言わない信用して欲しい」

木野さんはそこまで言うとき大きく息を吐く。

同じ体験をしていた木野さん、だからじゃないけど信じたい気持ち強い。

「ハリー、私信じてみる」

「なんやて」

私の言葉にハリーが目を大きくする。

「だって昨日一緒に戦ってくれたし、悪い人には見えないもん、それに一番ははぐたんが嫌がつて無いよ」

「わかつた、はなを信じるさかいな、オイお前裏切ったら唯じやおかんど」

肩をすくめ大きな溜め息を吐いたハリーは机の上にプリハートを3個置く。

「プリハートは後みつつある、まずは一緒に戦ってくれる仲間探しやな」

ハリーの言葉に机の上のプリハート、横目で見ると木野さんも少し眉間にしわを寄せ
ている。

「プリキュアは私1人でやる、はぐたんは私は守る！」

「な、なんやて?!」

ハリーが思わずネズミに戻る、私は私の考えを話す。

「それに木野さんも居るし、プリキュアは1人の方が格好良いじゃん、目立つ！」

「ハリー、人型になってくれ」

木野さんがハリーに頼むと直ぐに人の姿になったハリーにはぐたんを渡す様に木野
さんが指示を出す。

ハリーは文句を言いながらもはぐたんを抱っこし言われた通り部屋の隅に移動するのを見て振り向いた木野さんのにこやかな笑顔、でも少し怖い笑顔を私に向けてくる。「戦う奴なんて放つておいても向こうから来ると思うが、端から1人で戦うつてのは身の程知らず」

木野さんのキツイ言い方に少しムツとする。

「私プリキュアだよ、昨日強かったでしょう?」

「黙れ」

一言、その一言で私は尻餅をついて動けなくなる、胸が苦しくなつて息がし辛い手足も震えてまともに動かない、木野さんの銀色の瞳に睨まれただけで怖くて怖くて……

「立てよ、プリキュアなんだろう?」

冷たい声、まるで直接心臓を掴まれたみたいになり身がすくむ、喉がひり付いて言葉が出ない。

「あ……かつ……ううう……」

「ハリー動くな、はぐたんが間合いに入る」

いきなりハリーに動くなつて、動いて無かつたよ……

長い長い時間が過ぎいきなり体が軽くなる。

「5秒だ、少し圧を入れただけでそのありさまだ、無理やり仲間を集めろとは言わない、

だが仲間は必要だ」

木野さんは片手で私を引き上げるといきなり抱きしめた。

「え、ちよ、ちよつと」

「すまなかつた、今少し気を入れる直ぐ楽になるからな、辛かつたな良く耐えた偉いぞ」
全身がいきなり温かくなり不安な気持ちや震えていた手足に力が入る、それに気が付いたのか木野さんがゆつくりと私を解放する。

「お前、はなに何してるねん」

「ハリー、お前だつてプリキュアが1人じゃ不安だつたらう、少し現実を見せた殺気の数歩手前の圧をはなに掛けた」

ハリーに説明する木野さんの横顔は物凄く辛そうだったけど、私は少し木野さんが怖くなった。

薬師寺さあや

「……、……な、……め、さ……か、……はな、目を覚ませ、はな」

肩を揺さぶられて目を覚ますと、目の前に木野さんの心配そうな顔があつて、私は悲鳴を上げそうになつた。

「うなされていたが大丈夫か?」

怖い夢だつた。世界が止まり戦士達が破れる夢、恐怖と絶望、明日を考えられない世界……

いきなり泣き出したはぐたんをあやす為に立ち上がり体を揺らす、泣き止まないはぐたんを心配しながらも頭の片隅ではさっきの鮮明な夢を思い出し、身震いする。

どんなにあやしても、はぐたんは大泣きするばかりで途方に暮れていると、ドアの開く音が聞こえ泣いていはぐたんも泣き止んで、私と同時に開けられたドアを見つめた。

「野乃さん?」

「へ、何で?」

立っていたのは薬師寺さん、お互いが不思議そうに声を上げる、けど、はぐたん頬を引つ張るのをやめて凄く痛い。

はぐたんが行きたがるので、薬師寺さんに抱っこして貰うと、はぐたんは物凄くご機嫌になる。

「こんにちは、えつと……」

「はぐたんって言うの」

「はぐたん」

薬師寺さんが、はぐたんの名前を呼ぶと更にご機嫌になる。

「すつごいニコニコだ」

はぐたんをあやしなごら窓に歩いて行く薬師寺さんを見つめる。

「いい感じの子や、かわいいし」

ハリーの言葉に、ちよつとだけ対抗意識が生まれてくる。

「私だって、はーぐたーん」

抱っこしたら行き成り泣かれました、はぐたん顎蹴らないで痛い。

「そろそろ、ミルクじゃないのか？」

木野さんの声に後ろを振り向くと木野さんは上手くハリーを隠していた、木野さんが体を動かすとそこにはミルクが置いてあった。

「2人ともグツジョブ、だけど作り方が分からないな……」

「分からない時は調べよう」

薬師寺さんが直ぐにパソコンを開き、ミルクの作り方を調べ出して作ります。

「あの……はぐたんの事驚かないの？　ってか何でここに？」

薬師寺さんはミルクを適温に冷やしながら呟く様に話し出した。

「前に不思議な事があってね、空から赤ちゃんの声が聞こえたの」

勢いよくこちらを振り向く薬師寺さんは表情は少し戸惑っているようにも見えた。

「信じて貰えないかもしれないけど……」

私が転入するちよつと前の話、時間的には木野さんが住んでいた街を出たぐらい、私と同じ体験をしている薬師寺さん……

「良く分からないけど、赤ちゃんの声の方に行くとは何時も野乃さんに会うの……」

思いだされる初めて会った日の事、あの時もそうだったんだ……

「よし、出来た」

ミルクを持つて笑顔の薬師寺さんは天使の様に可愛かった。

窓際ではぐたんにミルクを上げてる薬師寺さんはまるで聖母の様に思わず見とれてしまう。

「絵になる、さすが天使……」

「この子や、こう言う子がプリキユアにええんや、頭も良いし優しいし可愛いし」

ハリーがべた褒めなのがちよつと癪に障る、思わず唸っていると壁に寄り掛かってい

た木野さんが呆れた声を上げた。

「お前の判断基準が分からない、戦いに可愛いとか関係ない本人の意思と覚悟だけだ、まあ……確かに美少女なのは認めるが」

木野さんまで美少女って言いだし、確かに薬師寺さんは可愛いけど釈然としない、思わず木野さんを睨みつけるといきなり頭を撫でられた、子供じゃないもん。

撫でて貰った後私は薬師寺さんの側に歩いて行く。

「薬師寺さんは凄いや、色々丁寧だし賢いし私には出来ないよ」

「私に出来ない事が貴女には出来ます、貴女に出来ない事が私には出来ます、力を合わせれば素晴らしい事がきつと出来るでしょう」

薬師寺さんが窓の外を見ながら嘯み締める様に話してくれる、不思議とその言葉が胸に入ってくる。

「尊敬しているマザー・テレサの言葉なの、私この言葉がとても好き。野乃さんは自由な発想が合つてなりたい自分の未来があつて、私よりずっと凄いや。私には何も無いから……」

「みんなに優しく出来るじゃない」

「それぐらいしか出来ないの、野乃さんみたいに勇気が無い」

薬師寺さんの辛い胸の内、こんなにも何でも出来る薬師寺さんでもこれだけの悩みを

抱えている。

「薬師寺さん、や、えつと……」

何かが違うこの呼び方、少し悩んでいると薬師寺さんは微笑む。

「委員長で良いよ」

その言葉で頭の中のモヤモヤが晴れた気がした。

「委員長と話しているんじゃないもん、さあやちゃんと話しているの」

私の言葉に戸惑うを見せるさあやちゃん、私は私の思いを伝える。

「さあやちゃん勇気あるよ、だって誰かに優しくするってすつごく勇気がある事だもん」

「そんな……私……」

「褒められたらありがとうだよ。未来は無量大、何でも出来る何でもなれる！ フレー

フレーさあやちゃん！」

「はなの言う通りだよ、薬師寺さん」

後ろから掛けられた声に私達は振り向くと木野さんが優しい笑顔を浮かべていた。

「小さな事はたしかに小さい、けどな、どんなに小さなことでも真心を込めて行うことは

偉大なことなんだ」

木野さんの言葉にさあやちゃんがハツとする。

「その言葉……」

さあやちゃんの言葉に頷く木野さん。

「薬師寺さん、あなたは、あなたでいればいい」

私と木野さんの言葉がさあやちゃんに届いているかは分からないでも、大切なのは思
いだよね。

丁度ミルクを飲み終わったはぐたんにげっぷをさせるさあやちゃんに私の思いは固
まっていた。

「木野さん良い事言うね、えつとね、さあやちゃん、お願いがあるんだ、あのね……」

エールとさあやと獣鬼

「私と……」

言いかけた瞬間地面が大きく揺れた、でも、明らかに地震じゃない、慌てて外を見ると直ぐ近くで土煙が舞っていてただ事じゃないのが分かる。

私と木野さんは直ぐに現場に向かって走り出したけど、さあやちゃんまで着いて来てしまった。

暴れているクレーンみたいなロボット、その姿に一瞬息を飲む。

大泣きし出すはぐたんにハリーは私の上から焦った声を出す。

「あかん、アスパワワがドンドン無くなつとる」

「え、ねず、しゃべっ……」

しゃべるハリーにさあやちゃんが驚いているけど今はそれどこじゃない。

「はな！」

「うん、はぐたんは私が守る」

ハリーの呼びかけに即答をする。

「ダメ、危ないよ！」

さあやちゃんが私を心配して引き止めてくれる、私はさあやちゃんを安心させる為に正直に話す事にする。

「さあやちゃん、私プリキュアなんだ！」

振り向いて精一杯の笑顔を見せる、驚くさあやちゃんに頷くと私はプリハートを取りだした。

「ミライクリスタル！ ハート・きらつと！」

「は〜ぎゅ〜・ぎゅ〜・ぎゅ〜」

「輝く未来を抱きしめて！ みんなを応援！ 元気のプリキュア！」

「キュアエール！」

私はキュアエールに変身するとオシマイダーに向かって走っていった。

目の前で信じられない事が起きました、野乃はなさんがプリキュアでみんなを守って
いた事。

いきなり現れたクレーンのお化けに野乃さんは向かって行ってしまった、みんなの為
に？ はぐたんの為に？ やっぱり彼女は凄い、私なんかとは違う私は……

はぐたんが私の服を強く握って来る、温かい体温が私に伝わってくる守りたい小さな
命……

「真つ直ぐだな、はなは……」

隣に立っていた男性、名前はたしか木野八雲さん、木野さんは野乃さんとは知り合い
みたい、どうしてそんなに落ち着いているの？

「最初はアレぐらいでも良いか……」

木野さんが呟くと腰に付けていたケースから不思議な物を取り出して開くとそれは
まるで音叉だった。

その音叉を見てはぐたんが手を伸ばそうとするのを引き止めていると木野さんがこ
ちらを見てはぐたんに笑いかける。

「大丈夫だよはぐたん、直ぐに行くから」

優しく問いかける木野さんは私に笑いかけてくる。

「薬師寺さん、はぐたんをお願いね」

「はい、任せて下さい」

物凄く優しい笑顔、安心させてくれそうな笑顔、今の私に出来ることははぐたんを守る事、でも、どんなことでも助けてあげたい。

木野さんがはぐたんの目の前に音叉を差し出すとはぐたんは嬉しそうに音叉を小さな手で叩いた、美しい音が澄み渡る。

「はぐたん、はなを、エールを助けてくる、待っていて」

木野さんは音叉をゆっくりと額に持つて行きながら歩き出す、紫色の炎に包まれる木野さんに思わず声を上げた。

「木野さん！早く火を消さないと！」

私の声は届いていないみたいで炎に包まれながら悠然と歩いて行く、次に瞬間木野さんが腕を振るうと炎は散っていき木野さんも変身していた。

「鬼姫の使者、音撃戦鬼、獣鬼」

小さいが力強いその声に、そしてその姿に私は息を飲んだ。

アンジユの鵬翼

野乃さんが、ううん、キュアエールが戦っている相手の攻撃を綺麗なステップで避け続ける。

「アナタ達に未来は渡さない！」

エールが信じられないほどのジャンプで相手を攻撃しようとしたら腕のクレインが伸びて一気に上昇し攻撃を躲す、バランスを崩したエールを木野さん、獣鬼が横抱きに抱え地面に下ろす。

「エール、突っ込みすぎ。もつと落ち着いて」

獣鬼は相手の攻撃を避けながら更にエールに声を掛けるが、エールは攻撃を避けるので必死になっていた。

「エール！ お前は何のために戦う！ 何を成し遂げるために戦うんだ！」

「私は絶対に未来を、はぐたんを守る！」

エールの叫びに、私はさっきまでの会話を思い出す。

「未来は無限大何でも出来る何でもなれる！ フレーフレーさあやちゃん！」
「薬師寺さん、あなたは、あなたでいればいい」

「何でも出来る、何でもなれる、私は私でいればいい……」

小さな事かも知れないでも大きな事、凄く簡単に凄く難しい、私には勇気が必要な事、でも、私は未来を見つけた。

「心が……あふれる！」

私の思いに呼応するかのようにぐたんが淡い光を放ち出し私を包む、胸が熱くなりはぐたんが生み出す光りに導かれるように胸の熱さが光りと共に溢れ出し、光りが結晶になっっていく。

目の前に現れた青く美しい水晶、どんなものにも屈しないその輝きに私は魅了される、手を差し出すと水晶は私の手の中に納まり強い脈動を感じさせながらも、物静かな湖面をも連想させる。

「ミライクリスタルが生まれよった！ プリキュアになるんや！」

攻撃を避けた獣鬼が私のすぐ近くに来ると私の手のクリスタルを一瞥する。

「薬師寺さん、いや、さあや！ 決めるのはお前自身だ！」

「私自身……私にそんな事出来るのかな……」

獣鬼はそう叫ぶと腰から2本の棒を取り出し振るいだす。

「エール！ 飛べえ！ 烈火弾！」

獣鬼が棒を振るうと幾重もの火の玉が怪物に当たる。

「さあや。全ては心から始まる、決めるのは君だ。だがな状況に流されて答えは出さな、分かったな！」

怪物を見据えたまま私に言葉を掛け獣鬼はまた怪物に向かって行く、怪物を蹴ろうとしたエール、だが寸前で避けられ攻撃を受けそうになるのを獣鬼が救いだす。

頷き合う2人、また怪物に向かって行くその姿に私は、私は……

「出来るよねきつと、私の中にも勇気が……」

溢れる思いと勇気を胸に心に従おう。

「ミライクリスタル！ ハート・きらつと！」

「は〜ぎゅ〜・ぎゅ〜・ぎゅ〜」

「輝く未来を抱きしめて！ みんなを癒す！ 知恵のプリキュア！」

「キュアアンジュ！」

青い光が私を包み体の中から力が溢れるのが分かる、自分の姿を確認すると思わず声が出る。

「変身出来た……」

「キュアアンジュ……」

眩くエールの隣で獣鬼が少し思い詰めた表情をしている。

「ふざけるな！ 行けえ！ オシマイダー！」

ビルの骨組みの上にいる男の命令に従いオシマイダーと言われた怪物は私に向かって鉄骨を投げつけてくる、でも私は不思議と怖くは無くやるべき事が分かっていた。

「フレ！ フレ！ ハート・フェザー！」

青く輝く羽が集まりハートを形作り鉄骨に対し押しだすと青いハートは簡単に鉄骨を弾き返す、エールと獣鬼に呼びかけながら走り寄る。

「キュアエール、獣鬼」

「ありがとう！」

エールと獣鬼の言葉に頷くと自分の考えを話します。

「クレーンは重心が高いから、足元を狙えばバランスを崩すわ」

オシマイダーが距離を空けながら両腕を伸ばして攻撃をして来る、咄嗟にハート・フェザーを展開させ攻撃を防ぐ。

「エール隙を作る、構えてろ」

獣鬼はそう言うのと私が弾いた鉄骨を持ち上げオシマイダーの足元に向かって投げつける、横回転しながら鉄骨は足に当たりオシマイダーは地響きを立て転がった、エールは獣鬼の作った隙を見逃さずに行動を開始しだしていた。

「フレ！ フレ！ ハート・フォーユー！」

エールの作りだしたハートがオシマイダーを包み込み浄化させるとオシマイダーを操っていた謎の男はすでに消えていた。

エールが私に笑いかけてくる。

「1人じゃ出来ない事も2人なら、2人で出来ない事は3人なら出来る！」

エールの言葉がすんなりと胸に入って来て温かい気持ちになる、私が心に抱えていた不安が霧が晴れる様に消えていく。

「さっきのお願いの続き、さあやちゃん私と一緒にプリキュアやろうー！」

「うん、よろしくね、はなちゃん」

傾いた太陽に日に照らされエールは魅力あふれる笑顔を私に向けてくる、まだ少し怖いけどエールとなら頑張れそう。

第3話 泣くのは赤ちゃんのお仕事ですよ

輝木ほまれ

学校が終わってさあやちゃんとはぐたんの所に行ったら物凄く不機嫌で何をやっても泣き止まなくて、ハリーが出したミライパッドで調べたら機嫌の良くなる所を教えてくださいただけ……

着いた先は日本庭園、でも、はぐたんは愚図つたままミライパッドは今度は別の場所を差し出して、当ても無いので向かう事になった。

「何これー！」

「のびのび町の名物、車で移動する動物園だよ」

簡易的に設置された柵の中には羊や兎、モルモットとか居て家族連れの笑顔であふれていた。

はぐたんに動物を見せるけど、興味が無いみたいで泣き出してしまい、私とさあやちゃんは急いで柵の外に出た。

「よーよー」

一生懸命にあやしているといきなり威嚇する様な低い声が私達を捕える。

「ビービー五月蠅いなあ、だから餓鬼は嫌いなんだよ」

私達に凄んでくるサラリーマンらしき男性の目は座っており私とさあやちゃんは恐怖で動けなかった。

そんな私達を助ける為にサラリーマンに立ちはだかる人影。

「輝木ほまれさん?!」

「何だ、姉ちゃん?」

数歩ほまれさんに近づいたサラリーマンは更に凄んで来る。

「格好悪う、ガキは嫌いつてアンタも昔は子供だったんじゃないの?!」

「何だとお……」

サラリーマンは更にほまれさんに近づくといきなり右腕を振り上げた、ほまれさんが殴られると駆け出そうとした時、サラリーマンの腕が掴まれた。

「いきなり暴力に訴えるのは感心出来ないな」

言葉と共に腕を捻りあげたのは私もさあやちゃんも知っている人。

「木野さん!」

「よっ、家に行ったら居なかったから捜したよ」

「放せ、貴様」

サラリーマンが抵抗するけど木野さんは涼しい顔をしていて、やっぱり少し怖いかも

……

木野さんはサラリーマンを突き飛ばす様に放す。

「何にイラついているかは分からないが、年下に八つ当たるなよ」

サラリーマンは木野さんを一度睨むと逃げる様に去って行き、木野さんは大きな溜め息を吐いた。

「ありがとうね、えつと……」

「輝木ほまれ」

「俺は木野八雲、輝木さんありがとう、はな達を守ってくれて」

木野さんは小さく笑うとほまれさんに頭を下げた。

「暴力に訴えるなど言った者が、腕を捻っているんだから説得力に欠けるね」

自嘲的に笑う木野さんを見ていると何だか少し胸が辛い。

「別に良いよ、こつちも助かったし、ありがとう……」

ほまれさんと木野さんが連れだつてこちらに歩いて来る、ほまれさんははぐたんを見ると途端に破顔した。

「かわいい」

はなの母

「お姉ちゃん？ 赤ちゃん?!」

いきなり声を掛けられて振り向くと妹のことりにお母さんが驚いて立っていた。

「何してるの?」

ことりが少し足早でやってくるとそれに驚いたはぐたんが愚図りだしてしまう。

「抱っこさせて」

お母さんが私に手を差しよべながらはぐたんを優しく胸に抱き上げる。

「どうしたの? よしよし」

お母さんが優しく問いかけながらはぐたんを包み込む、安心しきった様に笑い声を上

げるはぐたん。

「笑った……どうして……」

「ところでこの子はそちらの男性のお子さんかしら?」

お母さんが木野さんに話しかけると、木野さんは優しい笑顔を浮かべる。

「いえ、自分は野乃さん達とちよつとした知り合いで木野八雲と言います」

「木野……八雲……さん……?」

お母さんが木野さんの名前を聞いて何かを考えだしていると木野さんが話しかけた。
「その子の親は後ろの彼ですよ」

木野さんが何でもない様に話し後ろで人間モードになったハリーに押しつける。
「娘さんにえらいお世話になっております」

ハリーが顔を引きつらせながら挨拶をして木野さんを睨みつけるが、木野さんは笑顔のままだった。

「貴方がこの子の？ どちらが親でも若いお父さんね」

お母さんはハリーを眺めながら感心しているようだった、ここままだと不味いと思った私は話題を変える為に少し大きな声でお母さんに話しかける。

「ママも動物園に来たの？」

「ちよつと取材、タワーにね」

のびのびタワー、はぐぐみ町のシンボルたるランドマークタワー、その展望エリアは街全体をそして遠くの山々まで望む事が出来る。

「——加音町の時計塔みたいなものか、しかし初めて戦ったあの時計塔が学校の建物とは思わなかったな……」

簡単な説明文を読んでいた木野さんがポツリと呟いた、前住んでいた街を懐かしんでいるのでしょうか、今は何も言わずに聞かなかつた事に、何時か話してくれるのを待ちます。

「貴女がさあやさんにはまれさんでしょう」

はなさんのお母様に声を掛けられて私は声のした方に体を向ける、はなさんは窓に近づいており嬉しそうに外を見つめている。

「はい」

「え、ええ」

私とほまれさんが返事をするとおばさまは慈愛に満ちた笑顔を向けてくれる。

「はなに聞いてるわ、とつても素敵な人達だつて」

私達は思わず赤面してしまい、ちゃんとした挨拶が出来なかつた。

「タワーに遊びに来たんですか？」

「んー、半分仕事って言うか」

「ママはね記者さんなんだよ」

私達の会話にはなさんの妹のことりさんが入って来て説明をしてくれる、その表情からおばさまの仕事に対する尊敬が見て取れて私は少し嬉しさを感じた。

「さつきも日本庭園見て来たんだよね」

「ママ達も行ったんだ」

はなさんが小走りにち近づいて会話に加わってくる。

「街を取材するならやつぱり名物ののびのびタワーよね」

話をしているうちにはぐたんが眠ってしまい、ハリーが驚きの声を上げる。

「寝よった、まるで魔法や」

「ちよつとコツがいるのよ」

ハリーの言葉におばさまがにこやかに話し出す。

「心臓の音を聞かせると落ち着くの、お母さんのお腹の中に居たころを思い出すらしいわ、だからこうして赤ちゃんの耳を付ける様にして抱くと良いのよ、はなとことりで慣れたものよ」

そう話すおばさまは慈愛に満ち溢れていて大人の女性の強さと美しさに輝いていて私は憧れを抱く。

「変わります」

「待って、まだ眠りが浅いからしばらくはこうやって落ち着かせないと」

ハリーの申し出を断り、おばさまはぐたんの眠りが深くなる様にゆつくりと歩き出す。

「寝顔も可愛い……」

顔を蕩がせた輝木さんとことりちゃんはおばさまの後に着いて行き窓に移動する。

何となくミライパッドを見てみると表示されていた点私が思っていた事と違う事に気が付く。

「移動動物園じゃ無かったかもはぐたんをご機嫌にするものつて、ほら光り」

説明をしながらはなさんにパッドを渡すとパッドを見ていたはなさんは光りの点その位置に居る

おばさまを見比べる。

「これって、ママ？」

側に来たハリーにパッドを手渡し一緒に着いてきた木野さんも覗きこむ。

「お母さん凄いい、やつぱり経験には敵わないね」

「うん、悔しいけど私まだまだ子供だな……」

「嫌でも大人になるんだ、子供は子供でないと出来ない経験が沢山ある、未来を夢見て今

を一生懸命に生きて行けば良い、失敗や過ちを恐れる必要も無い、今のうちに沢山経験し自分の糧にするんだよ」

木野さんは何かを思い出しているみたいで、懐かしそうにしている木野さんの昔の話も聞きたいけれど私はもつと気になる事がある。

「ねえハリー、はぐたんのママは？」

私の質問にハリーは眉を寄せた後に少し目を伏せ人の居ない方に歩き出して行く、私とさあやちゃんそして木野さんも後に着いて行く。

ハリーと八雲

「俺のいた世界もこうやった、明るくて笑顔と希望にあふれる世界だった、アイツ等クライアス社の連中に時間を止められるまではな、アスパワワを奪われて未来が無くなってもうた、俺以外は……」

眉間に深いしわを寄せ苦しそうに眼を閉じるハリーに私は言葉が見つからずに、する様にはぐたんを見つめた。

「何とか俺ははぐたと一緒にミライクリスタルホワイトの力で逃げて来たけど、ミライクリスタルホワイトはそんな時力を使こうてもうた、はぐたんに8個のミライクリスタルの力を与えたらなた時間が動き出すんや」

ハリーの話聞いて私の周りの温度がガクンと低くなつた気がした、寒気がし出して足が震えだす、今になると木野さんに身の程知らずと言われたのが分かってくる。

「ミライクリスタルって……」

「はな達のクリスタルの事や」

「って事はあと6個……」

「ああ、見つけんとクライアス社の奴らを放っておいたらここのも、俺の世界みたいに」

私は寒気が酷くなり涙が溢れそうになる、未来が無くなる幸せな家族が、大切な仲間達が石の様になって動かなくなっていく、少し前に夢で見た世界、それはもう恐怖しかない世界、私は……

「そんな事にはさせない」

力強い声、凍えそうな私の心を温めてくれた声の主は木野さんだった。

「未来は無くならない、幸せも悲しみも、辛さも喜びも全て抱いて人は生きて行くんだ。

俺はここに誓う、この戦いに勝利しはぐたんに、いや、はぐたんだけじゃない、はなにもさあやにも、ハリーにも未来をプレゼントして見せる、光り輝く未来を切り開く力となろう」

木野さんの言葉を聞いたハリーは一瞬目を潤ませるとそれを覚らせない様に窓の方を向く。

「ああ、頼むわ木野……力貸したって……」

「任せろ、約束は守る、絶対に」

小さく呟くハリーに優しくも力のある声を出す木野さん、私は男性2人のやり取りに胸が一杯になり先程までの恐怖を感じていなくなっていた。

「敵だ」

木野さんの眩きで私達は後ろを振り返る、展望台に居てもオシマイダーの頭が見え余りの大きさに息を飲む。

「クライアス社だ」

ハリーの小さな叫びと同時にのびのびタワーを揺らしだすオシマイダー、よろけそうになった私達を木野さんが受け止めてくれた。

「行こう」

木野さんは私達の耳元で小さく眩くと非常口の方に顔を向ける。

非常口から点検用の屋上に出た私達はたがいに頷き合った。

「ミライクリスタル！ ハート・きらつと！」

「はーぎゅー・ぎゅー・ぎゅー」

「輝く未来を抱きしめて！ みんなを応援！ 元気のプリキュア！」

「キュアエール！」

「輝く未来を抱きしめて！ みんなを癒す！ 知恵のプリキュア！」

「キュアアンジュ！」

「鬼姫の使者！ 音撃戦鬼！ 獣鬼！」

変身の済んだ私達は同時にジャンプし同時にパンチするが防がれてしまう、そのまま近くの屋上に着地をしオシマイダーを睨みつける。

「出たな！ プリキュア！ それに変な鬼！」

オシマイダーを操っていた男の鬼気迫る声に私は怒鳴り返す。

「何でこんな事を！」

「組織で成り上がるには仲間を出し抜かなきゃ俺ちゃん1人でお手柄独り占めつてやつ？」

男の下卑た笑いに私が怒鳴る前に獣鬼が声を張り上げた。

「なら、失敗も貴様1人で償うんだな！」

「うるさい！ 行けえ！ オシマイダー！」

迫るオシマイダーを避けようとジャンプするがオシマイダーに私とアンジュは捕まってしまう、そのままビルに向けて弾きと飛ばされる。

碌な抵抗も出来ずに私とアンジュは飛ばされていく、ビルにぶつかると覚悟を決めた

時に私達を包む感触に捕らわれるとビルに叩き付けられ違うビルの屋上に着地したがダメージは薄かった。

「じゅ、獣鬼！」

アンジユの声で振り向くと膝をついた獣鬼がいた、その姿を見て私はどうしてダメージを受けていないのか覚り血の気が引いた。

「ぐ、ぐめんなさい獣鬼……」

獣鬼に駆け寄り謝るが獣鬼は立ち上がりながら笑うと私の頭を撫ぜた。

「そこはありがとうだろうエール、それより2人とも下を見てくれ」

「ああ、あの人！」

獣鬼に言われ下を見るとほまれちゃんを殴ろうとして木野さんに止められたサラリーマンがアスパワワを奪われていた。

「オシマイダーを倒さないと元には戻らないだろうな」

「せいかい、けど、おっさんだけじゃなくて、お前らみんな明日は来ないから」

「オシマイダー！」

「人の時間を！ 未来を奪って！」

掛け声と共に迫ってくるオシマイダーに怒りをあらわにするアンジユ。

「フレ！ フレ！ ハート・フェザー！」

オシマイダーを受け止めるハート・フェザー

「オシマイダー！ 押せ押せ！」

オシマイダーがハート・フェザーの力を吸収しドンドンと大きくなる。

「流石に無理じゃね、どーよこのでかさ！」

上機嫌で叫ぶ男を無視して私と獣鬼は飛び出していた。

「はぐたんの為にも！」

私と獣鬼が叫ぶ、私は力いっぱい殴り付け、獣鬼が体を駒の様に回転させながら蹴りを入れる。

一度タワーの一番上に着地するとまた2人同時にジャンプすた。

「私はもつともつと大きくならないといけないから！ イケてる大人に！ カッコイイ大人に！」

「光り輝く道を切り開く！ たとえどんなに困難でも！ あの小さな手に！ 未来へのバトンを渡すんだ！」

2人でパンチを決めオシマイダーを押し返すと、獣鬼はオシマイダーを足場にして操っている男に跳躍する。

「これ以上お前の好きにはさせない！」

掛け声と共に攻撃をするがギリギリでガードされるが男が思いっきり吹き飛んで行

く。

私はその隙を逃さずにオシマイダーに最後の攻撃を仕掛ける。
「フレ！ フレ！ ハート・フォーユー！」

野乃一家と

戦いが終わり日が傾く中私はお母さんの所に走っていた、その姿を見つけた時私は胸の奥から思いつきり声を張り上げた。

「ママー！」

「はな！」

足を緩めずに私はお母さんの胸に飛び込むとお母さんは優しく抱きしめてくれた。お母さんの温かい体温に優しい匂い、大好きなお母さん。

「心配したんだから」

「ママ……心臓の音が聞こえる……」

トクントクンと安心する音色、はぐたんの気持ちが分かる、このままずっとこうして居たい。

「子供、甘えちゃって」

ことりが私を馬鹿にしてくる、私がムツとして文句を言おうと息を吸う。

「甘えられる内に甘えた方が良い、親に甘えるのは子の特権だ、遠慮する事は無いよ。それにね、親は子供が甘えてくるのが嬉しいし待つても居るのさ、羨ましがってないで甘

えなさい」

木野さんが優しくことりに問いかけるとことりは少し俯いてしまった。

「ことり、おいで」

お母さんの優しい声、ことりは顔を上げると戸惑いながらお母さんに抱きしめられた。

お母さんとことりを見つめる木野さんの目線は優しく、私は木野さんに対する怖さが少なくなる。

はぐたんが少し声を上げるとハリーが戸惑ってしまう、ことりを抱きしめたままはぐたんの声を聞いたお母さんは頷いた。

「ああ……」

家に移動した私達は家族全員とさあやちゃんと木野さんを含めた7人でダイニングに居た。

「はい、どうぞ」

「おおきに」

お母さんから哺乳瓶を受け取ったハリーははぐたんミルクを飲ませ始める。

「良い飲みっぷりだ」

勢いよくミルクを飲むはぐたんを見てお父さんが嬉しそうな声を上げる。

「パパさんまで……何から何まで、えろうすんません」

ハリーが恐縮しているのが少し面白くって笑うのを堪えるのがちよつと大変。

「1人じゃ大変でしょう、困った事があつたら何時でも来て」

「ほんまでつか、ならお言葉に甘えて」

お母さんの言葉にハリーが喜びの声を上げる、そんなハリーにお母さんは頷くと木野さんの方を向く。

「木野八雲さん、でしたっけ？」

「はい、そうですが」

「もしかして、お仕事は調律師ですか？」

お母さんの質問に木野さんが目を丸くする、こんな表情を見た事が無かったので声を

上げそうになった。

「そうですが、何でそんな事知っているんですか？」

「一度取材をさせて頂くかと思っただんですよ、ですが企画が流れてしまって……」

「取材？ 木野さんって有名なの?!」

お母さん達の会話に思わず入り込んでしまう、気になるからしょうがないよね。

「俺は有名じゃないよ、ただの調律師だよ」

「えー話聞きたい、ママ教えてよ」

お母さんに詰め寄るとお母さんは木野さんの方を見る。

「私も少し聞きたいです」

さあやちゃん小さく手を上げてお願いすると、ことりもそれに同意した。

「俺の話なんて大した事無いよ、でも、まあ良いか……過大評価なら訂正しますのでどうぞ」

木野さんは白旗を上げたので皆の視線がお母さんに集まる、お母さんは一度咳ばらいをし話し始める。

「木野八雲、音楽の街と呼ばれる加音町にいきなり現れた調律師、その腕は確かで街の中でもトップクラスと言われ、若手ではナンバーワンと目されている、とりわけ教育施設に対する調律に尽力し、特にアリア学園の調律に力を注ぎそこから噂が流れ始める。」

有名な仕事としては古い音楽堂のパイプオルガンの整備を手伝い完成にこぎつけた、また街一番の人気音楽隊、音楽王子隊の調律も手掛け音楽に悩んでいた音楽隊リーダーの心を救ったとも言われており、それを最大の功績と言う人も居る、また著名な音楽家とも懇意にしておりその妻である世界的に有名なバイオリニストとも友好がある。

つい先日触れも無く街から出てしまい惜しむ声は大きく混乱が予想されたが、引き継ぎはしっかりとあつたので大きな混乱は今の所起こってはいない」

思つたより話が大きく皆の視線が木野さんに集中する、木野さんは何とも言えない表情をしながら後頭部を掻いていた。

「後はそうね、親しい人達とは名前で呼び合っていると、子供達にサッカーを教えているとか、食べ歩きが趣味とか、それ位かしらここで話せそうなのは木野さんですか、おかしい所ありましたか」

お母さんが木野さんに聞くと木野さんは大きな溜め息を吐いた、もしかして過大評価で困っているのかな？

「良くそこまで、引き継ぎの事まで調べましたね……完敗ですプライベートは内緒でお願いしますね」

全部本当なんだ木野さんって凄い、親しい人は名前で呼び合うか……

「木野さん凄いですね、もしかしてもうはぐぐみ市でも調律のお仕事しているんです

か？」

さあやが目を輝かせて木野さんに聞くと木野さんは少し笑いながら頷いた。

「うん、始めてるよそんなに忙しく無いし、今はそれほど仕事受ける気は無いよ、色々あるからね」

お父さんお母さんと木野さんで色々な話をし出してその会話に耳を傾ける、木野さんも格好良い大人だったんだな音楽の街で若手一番つてもしかして物凄いのかも、私は調律の話が聞きたくなつて会話の中に入って行つた。

第4話 星朧

新しい生活に

はぐたんにミルクをあげているとハリーと木野さんが色々な小物を棚に並べていた。

「何しているの？」

「こつちで暮らす為にも店でも開こうと思って」

「お店？」

会話しながらもハリーの作業は止まらないけど何でネズミでやってるの、何で木野さんも突っ込まないの？

「せや、ヘアメイク、ファッションその他色々女子の憧れが全て詰まったショップ！ その名もビューティー・ハリーや！」

「それいい！ 私もカリスマ店員になる！」

ハリーの話聞いて夢がどんどん広がる。

「いや、お前はやる事あるやろ、残りのプリキュア捜しや」

「無理に探さなくても勝手に現れると思うけどな、俺はまだ誘うのは反対なんだぞ、はなも良く考えろよ誘うって事は戦う事、それもちゃんと話をして誘えよ、間違っても格好

「良いとか表面的な話で誤魔化すなよ」

木野さんが在庫を数えながらこちらも見ずに話す姿にちよつとムツとなる。

「分かつてるもん、イーッだ」

私が不満そうに口を開くと木野さんは私をちよつと見てクスリと笑ってまた作業に戻る、木野さんの余裕のある態度が面白くない。

「そう言えば木野さんってどこに住んでるの？ はぐぐみ町？」

「ん、そうだよ。今は街のビジネスホテル、でも、戦いが長期化しそうだからどつかに家借りないとだな」

「なら木野、一緒に住まへんか？ 店の手伝いしてくれたら家賃はいらへんで、どや？」

箱の中から顔だけ出して木野さんを誘うハリーの姿が餌をねだっているみたいでちよつと面白い。

木野さんは持っていたペンのお尻をおでこに当てながら考える。

「そうだなあ……はぐたんの面倒もあるし、はなとさあやが手伝ってくれてるけど学業優先だしな」

「プリキュアもね！」

宙を見つめながら呟く木野さんに思いつき突っ込むと驚いたように私を見て来たのでちよつと満足。

「じゃあハリー悪いけど世話になるよ、はぐたんもよろしくね」

木野さんははぐたんに手を振りながら笑いかけるとはぐたんは笑い声をあげた。

はなちゃんに私とハリー、そして木野さんの4人ではぐたんの散歩を兼ねた買い出しの最中にはなちゃんがポツリと呟く。

「ほまれさん、プリキュア似合うと思うんだけど……」

その言葉に私と木野さんが同時に溜め息を吐く。

「あれ？ 木野さんは知ってたけど、さあやちゃんも反対なの？」

「そうじゃないけど……プリキュアって誘われてなる様なものかなって……」

「――薬師寺さん、いや、さあや！ 決めるのはお前自身だ！」

私がキュアアンジュになった時の事を思い出す、私は何を決めたんだろう、状況に流された訳では無いと思う。

「エール！ お前は何のために戦う！ 何を成し遂げるために戦うんだ！」

「私は絶対に未来を、はぐたんを守る！」

「……………いやはぐたんだけじゃない、はなにもさあやにもハリーにも未来をプレゼントして見せる、光り輝く未来を切り開く力となろう」

はなちゃんははぐたんの為に、木野さんは私達皆の為に戦うって言うてくれた、木野さんって一体何者なの？ 一度ちゃんと話が聞きたい特に鬼について……うん、鬼……鬼……フフ楽しみ。

思考の海を漂って色々と考えていると、何故が自動ドアの開く音が大きく聞こえ私を現実に引き戻す。

「行こう、モグモグ」

聞き覚えのある声に振り向くと犬のリードを持って茫然としている輝木さんが立っていました。

「によほほー、輝木ほまれさんー」

いきなり変な声をあげたはなちゃんの心配をしながら輝木さんを見る。

「何でこんなところに……」

所在なさそうに呟いた輝木さんにはぐたんが声をあげると途端に表情が崩れる。

「きや、きやわたん……」

はぐたんにデレデレになっている輝木さんに私達は皆笑顔を浮かべた。

輝木さんにはぐたんを抱っこして貰い、皆でのんびり散歩していると私の肩を軽く叩く感触に後ろを振り向くと木野さんが少し眉を寄せながら私を小さく手招きする。

私は側に寄ると木野さんが私の耳に口を寄せて小さな声で話しかてくる。

「輝木さんって足を怪我した事あるか？」

木野さんの意外な質問に思わず顔の方を振り向くと目の前に木野さんの顔があつて私は恥ずかしくなつて勢いよく顔を元の位置に戻す。

「微妙に庇っているんだよね……でも、あの足の運びは多分治っている……」

木野さんの眩きに私は顎に指を添えて考える。

「木野さん、後で調べてみます……」

「すまない、頼む」

一言私に囁き木野さんが離れる、木野さんの気配が遠ざかると何となく胸がざわめく、私はその感情を持って余しながら、楽しそうに犬と歩くはなちゃんを眺めていた。

ほまれとバスケット

「犬、飼っていたんだ」

「拾っただけ、迷い犬なんだ飼い主を探している間だけあの病院であずかって貰っているの」

何となく犬の事を聞いてみると意外な答えが返って来て私は少し感心する。

「モグモグって？」

「と、取りあえず今だけの名前」

はなちゃんの質問に少し赤面しながら答える輝木さん。

「かつわついい」

顔を赤くした輝木さんにはなちゃんが笑いかける、その笑顔を見て更に赤面する輝木さん、私はまたひとつ彼女の知らない一面を目の当たりにして好ましく感じました。

「不思議な出会いって言うか……」

少し懐かしそうに話しだす輝木さん。車に轆かれそうになった時に助けた迷い犬、その話の中で輝木さんが私達と同じ時間が止まる体験をしていた事に大いに驚かされる。

「何だったんだろう……」

複雑な表情の輝木さんにはなちゃんが小さく呟く。

「同じだ……」

目を輝かせているはなちゃん、私は木野さんを盗み見ると、木野さんは何かを考えているかのように目を閉じて後頭部を搔いていた。

「出てけ出てけ、ココは俺達が使うんだ、あっち行け！」

不快な声に私達は声のした方を見ると少し下の公園では私達とそう変わらない年齢の男子達が小学生に怒鳴り散らしてした。

「コラー！ 意地悪ダメ！」

聞き覚えのある怒鳴り声、さっきまでいたはずのはなちゃんは既に下に降りていて猛っており木野さんは片手で頭を抱えていた。

「なんだ、生意気な小学生だな」

「小学生じゃ、ない！」

私達が降りたところにははなちゃんは更にヒートアップしており唸り声まで上げていた。

「どうしたの？」

「バスケしたいのにこの人達が出て行って……」

私の質問に答えてくれた男の子の表情は曇っており私はいた堪れない気分になる。

「公園の1人占めは良く無いよ」

「じゃ、俺達に勝てたら変わってやるよ」

私の言葉に相手の男の子が不敵に笑う。

「バスケで？」

はなちゃん私が私に相談してくるが私も球技はそこまで得意ではない。

「なんだ、怖気ついたの……」

話している男の子にほまれさんが勢いのあるボールを投げつけた。

「3on3で良いの？」

「もちろん」

睨みつけるほまれさんに対して勝ったつもりでうなづく男の子。

「ん、お前どつかで……」

仲間の1人が輝木さんの顔に見覚えがあるらしく思いたそうとするがリーダー格の

男の子がそれを阻止した。

「誰だが知らねえけど俺達の相手じゃねえ」

少し嫌な笑いをする男の子を気にせずほまれさんは近くの女の子の頭を撫でながら

話しかける。

「大丈夫、勝つから」

木野さんが肩を軽く回しながら勝負を仕掛けて来た男子の前に立った。

「そんなに自信あるなら俺も混ぜて貰おうかな？ 最近運動不足でね、お前らだってアレだろう女の子に勝つても自慢にはならないだろう」

「かまわねえよ、オッサン一人入ったからって結果は変わんねえ」

木野さんは楽しそうに頷くと私の方を見てくる。

「さあや、悪いが俺と交代して欲しい、はなは今回の原因だからコートに入れておきたい」

「良いですよ」

私は小さく答えはぐたんの待つベンチへと向かいハリーからはぐたんを受け取り抱っこしながらベンチに座る、でも木野さん運動不足つてあれだけ戦いで動いているのにまだ運動足りないのかしら……

試合が始まるとボールを持っている人に対して木野さんが少しだけ腰を落とした、それだけで一瞬空気が張るのが分かる、男の子が慌ててパスを出し走り出すと木野さんは

周りを見渡ししていた。

はなちゃんの方にボールが飛んで行くが頭の上で取られ直ぐにリターンのパスが出る、あつという間に切り込んでいく姿を見て私はどうしてあの男の子達はみんなで遊ぼうって思わないのだろうかと感じている。

「話にならねえな」

馬鹿にした様に声を上げるとそのままシュート体勢に入るが輝木さんが簡単にカットをしボールを奪い相手の攻撃は終わってしまう。

「まぐれだー」

「どうかな」

イラついた声を出した男の子に対し輝木さんが少し笑いながら返し、その場でドリブルを始めこちらの攻撃が開始する、輝木さんがフェイントなどを使い相手を翻弄しゴールに切り込んで行く。

1人を避け綺麗なドリブルでゴールを目指す輝木さん2人目もいとも簡単に躲す。

「話にならねえな」

意趣返しをし不敵に笑う輝木さんに対して抜かされた2人は声を上げて悔しがる。

「電光石火……」

その動きに私は小さく呟いた、輝木さんがシュート体勢に入るとガクンと体勢が崩れ

それを見た私は思わず立ち上がる。

「そのまま打てええー！」

木野さんの叫びに輝木さんが顔を上げる、見たことの無い必死の形相でその場に留まりボールを放つ大きな軌道を描きながらボールがゴールに向かう、入ると思われたボールがリングに弾かれ大きく弾む。

「あああ」

思わず声が漏れる、視界に入る輝木さんの絶望的な顔。

ひとつの影がゴールに飛び上がると弾かれたボールを掴みそのままゴールに直接押し込んだ。

爆発した様な大きな音を立てたゴール、転々と転がるボール、ギシギシとリングが軋む音がする中沈黙が支配する。

「「うわああああああー！」」

子供達の絶叫で時間が動き出す、木野さんが転がっているボールを拾う。

歓声の中少しうつむいた輝木さんの沈痛な面持ち、その姿に私にはゴールを外した事に対する表情には見えず、もつと心の奥底の別の感情だと思えました。

「楽勝だね、な、輝木さん」

木野さんは優しく微笑みながらボールを輝木さんに投げる、ボールを受け取った輝木

さんは一瞬キョトンとした後に顔を赤らめて少し横を向く、その姿を見ながら私は木野さんはああいう事を無意識でやっているなら性質が悪いと思わずにいられなかった。

「あー！ 思いでした！ お前天才スケート選手の輝木ほまれだろう！」

対戦相手の男の子の一人が輝木さんを指さしながら騒ぎ出すと輝木さんの表情が曇る。

「黙れ」

木野さんの一喝、周りが静かになる中何故かはぐたんだけは嬉しそうな笑い声を上げていた。

「お前らは何で勝負した？ 彼女の得意なスケートか？ 違うだろう」

木野さんはそう言うのと輝木さんの頭を少し乱暴に撫でると輝木さんの顔が更に赤くなる。

「お前らだって勝てると思ったから勝負を挑んだんだろう、一緒に遊ぶ選択肢があったのにも関わらずお前らは手を伸ばなかったんだ、その子達に謝ってとつとと失せろ」

ビューティーハリーにて

その後私達は子供たちにせがまれ一緒にバスケットをする事になり、みんなが笑顔の中、輝木さんは何度か辛そうな表情を覗かせていました、結局私達はぐたんのミルクの時、間近くまでバスケットを楽しみました。

帰り際はなちゃんが輝木さんに対して大きな声を掛ける。

「ほまれさん、超格好良かった！ 運動神経抜群、めっちゃイケてた！」
「アంతの方がイケてるよ」

こちらを振り返らずに答える輝木さんにはなちゃんはキョトンとする。

「ほまれちゃん！」

ちゃん付けされた事に輝木さんは振り返り戸惑いの表情を見せた。

「私、ほまれちゃんと仲良くなりたいたい！ またね！」

満面の笑みで手を振るはなちゃん、輝木さんは何も言わずに行ってしまいました、その表情は少し柔らかくなっており、私は胸の中が少し温かくなりました。

次の日の放課後、ビューティーハリリーの開店準備の休憩中に少し前の記事を探す。はなちゃんは私が見ているミライパッドを覗きこみ、木野さんは手すりに背中を預け腕を組んで目をつぶっていた。

「この記事ですね……どうして辞めちゃったんだろうってずっと気になっていたんだけど……」

目当ての記事を見つけ目を通す。

「はな、音読」

「へっ、何で？」

木野さんの唐突な提案にギョツとするはなちゃん、木野さんは態度を全く変えずに口を開く。

「国語の勉強、あの小テスト見たぞ、もう少し頑張ろうな……」

「めちよつく！」

「ごめんな、わざとじゃないんだ、はぐたんが引つ張り出して遊んでたからさ、まあ、良
いから早く読む」

「はい、どれどれ、宙とぶ期待の星、天才輝木ほまれ——……ジャンプ失敗、怪我によ
る長期休養へ——……」

はなちゃんが記事を読み終わると大きく息を吐く木野さん、はなちゃんは遠くを見つ
め眉を寄せている。

「怪我してたんだ……バスケはあんなに凄かったのに、本当はまだ足が痛いのかな」

「はな、違うよ」

「そうですね、痛いのきつと……」

「さあや」

木野さんに小さく名前を呼ばれ私は言葉の続きを飲みこんだ、そのやり取りを見てい
たはなちゃんは私達を見つめた後に何かを感じたらしく目を伏せた。

「……敵だ」

木野さんが唐突に少し大きな声を出し置いてあるバイクに向かう、住まいをビューティーハリーに移すまで私達は木野さんがバイクに乗っている事を知りませんでした。

「早く!」

木野さんが私達にヘルメットを放りエンジンを始動させると、辺りにエンジンの重低音が響く。

私とはなちゃんがヘルメットを被りながら慌ててバイクに向かい、はなちゃんがサイドカーに座ったので私は後ろに座り少し恥ずかしいけど木野さんの腰に手を回す。

「なんや、どうしたんや?!」

「敵だ、行つて来る!」

ハリーが慌てて出てくると木野さんが短く言い切り、バイクを発進させた。

バイクで現場に着くと輝木さんが茫然と立っている。

「ほまれちゃん、何でここに?!」

「そんな事より先生が!」

切羽詰まった声で輝木さんが上を指さすと先生が宙に浮いておりトゲパワワを放出

していた。

「助けなきや……」

「オシマイダー」

輝木さんが眩くがオシマイダーが迫ってくる、一步後ずさる輝木さん。

「どうすれば……」

私達はバイクから飛び出すとプリハートを握りしめ輝木さんの前に陣取る。

「大丈夫、さあやちゃん」

「ええ」

「プリキュアに任せて！」

「ミライクリスタル！ ハート・きらつと！」

「は〜ぎゅ〜・ぎゅ〜・ぎゅ〜」

「輝く未来を抱きしめて！ みんなを応援！ 元気のプリキュア！」

「キュアエール！」

「輝く未来を抱きしめて！ みんなを癒す！ 知恵のプリキュア！」

「キュアアンジュ！」

「プリキュア……」

「来たなあ、やっちゃって！」

眩いた輝木さんに被せる様にクライアス社の男が軽く命令をするとオシマイダーはその巨大な手を振り落として来た。

私とエールで受け止め一気に弾き返す、よろけたオマイダーにエールが一気に飛び込んで行き私もそれに続きます。

「またこのパターンか、まったく……」

ぼやきながら歩いてきた最近良く見る男性、確か木野さんだったかな、が悠然と構える。

「アンタ、何か知っているの？ あのと二人がプリキュアだって」

「ああ、見ての通りだよ……ん、あの動き……今までのと違う？ ……まずいな……」

「説明になつて無いよー！」

怒鳴る私に木野さんは腰から変な物を取りだし広げて握る。

「悪い輝木さん、後でちゃんと説明するから今は先生を助けるのが先だ」

私を少し見て手に持った物を指で弾くと周りに澄んだ綺麗な音が響く、その道具をゆっくりと額に持つて行くといきなり体が紫色の炎に包まれ私は息を飲んだ。

腕を振るい炎を飛ばすとそこに立っていたのはどう見ても……

「鬼姫の使者、音撃戦鬼、獣鬼」

やけに耳に残る声を残し物凄い跳躍で敵に向かって行った鬼、獣鬼に、私は数日前の戦いを思い出し胸が熱くなった。

何とかオシマイダーの投げたボールを避けジャンプしたがオシマイダーは直ぐに次のボールを私に投げて来る、ボールが当たる直前、私は獣鬼に片腕で抱かれ敵の攻撃でダメージを受けていたアンジュの側に着地する。

「ありがとう」

また飛んできたボールを獣鬼が弾くとダメージがあるのか腕を押さえて私達を見てくる。

「気にするな、注意しろあの敵はこちらを調べつくしている」

「データはばっちりなんだよ！」

獣鬼の言葉を裏付けする様に自慢するクライアス社の男に獣鬼は小さく舌打ちをした。

「そうかよ、ならデータ以上の動きを見せてやる」

獣鬼が今まで見たことの無いスピードでオシマイダーを翻弄する、私もそれに続いて攻撃するが防がれて地面に叩きつけられる。

「エール！ しまつ」

私を気にした獣鬼も攻撃をまともに受けてしまい私達の側に叩きつけられる、せまるオシマイダーのバットの追撃にアンジュが立ち塞がる。

「フレ！ フレ！ ハート・フェザー！」

オシマイダーのバットをハート・フェザーが受け止める、拮抗すると思われたハート・フェザーが歪みだす。

「させるか！」

獣鬼が言葉と共に飛びだしハート・フェザーを支えるが歪みは大きくなる。

「エール、アンジュ逃げ……ぐうあー！」

獣鬼の奮戦空しく吹き飛ばされる私達、地面に叩きつけられる寸前に獣鬼が私達を抱え込みクッションに成ってくれたが私達のダメージも大きく動けそうにない。

「エール……アンジュ……」

「大……丈夫……」

「獣鬼こそ……私達の為に……」

ユラリと立ち上がった獣鬼は幽鬼の様で私は恐怖すら感じていた。

「下に見ていたつもりは無かったが……いささか慢心だった……」

獣鬼は足を踏ん張ると獣の様な咆哮を上げた。

雲散霧消

私は後から来たはぐたんとハリーと共にプリキュア達が飛ばされた方向に向かうと聞いた事も無い様な叫び声や音が聞こえ足を速めた。

倒れているプリキュアに満身創痍で立ち上がっている獣鬼、それだけで私は信じられない思いだった。

「プリキュア達って何でそんな……でも……」

思い出すのはバスケの帰り際の、野乃はなの笑顔に木野さんに乱暴に撫でられた頭の感触と心配そうに私を見ていた薬師寺さん、そして、はぐたんの笑い声……

「もう終わりかよ、さっさとギブ・アップしてミライクリスタルをこっちにちよーだい」
軽薄そうな声と共に怪物がプリキュア達に迫る。

「未来への希望を、貴様なんぞに渡す訳ないだろう！」

獣鬼が一步踏み出しもの凄い声を上げる。

「立てええー！ エエールー！ アンジユウー！ プリキュアは人々の希望ー！ どんな困難も立ち向かい決して諦めない光りの心と輝く命を持つ伝説の戦士ー！ 光りの使者達だー！」
獣鬼が敵に向かい足止めをする様に殴り合う姿に涙が溢れそうになる。

「言われなくたってええ！ プリキュアは諦めない！」

エールが立ちあがる、諦めない……その言葉が胸を打つ、心が熱い、体がはちきれそうだ……

「諦めない……私も……私も……」

飛び上がったエールに獣鬼、その2人の姿にかつての自分を重ね見出す、私の願いは、私の……

「もう一度……」

2人の姿に手を伸ばす届くか分らないでも、でも、この胸の高鳴りは嘘じゃない！

「うああああああ！」

心の底から抑えていた思いが声と共に溢れ出す、私は……

遠くで聞こえるはぐたんの声、不思議と私の思いと重なる気がした。

空に光が集まり美しく輝く黄金色のクリスタルが現れる、力強い光を湛え輝く一番星。

「何アレ……」

「走れえええ！ ほまれ！ 走れえ！ あの光がお前の輝く未来だ！ 恐れずに手を伸ばせ！」

獣鬼が叫ぶ、私に声を掛けたばかりに攻撃を受け地面に叩きつけられる。

「行けえええええ！」

それでも獣鬼は私に叫んでくれた、バスケの時もそうだあの男は……

走る！ 走る！ あの光に！ あの空に輝く星に！

怪物が迫ってくるでも、そんな事はどうでも良い、私は、私は、あの光を！

「やらせるかああー！」

獣鬼の絶叫が聞こえ目だけで確認すると下から怪物を蹴りあげていた、体勢が崩れた瞬間にはアンジユが殴り付け、止めとばかりにエールの全身を使った蹴りが怪物を吹き飛ばす。

「自分を信じろ！ ほまれ！」

「行けえええ！ ほまれちゃん！」

「行つてえ！ ほまれさん！」

3人の応援の背に手を伸ばす、私の未来へ後一步、後一步！ 後は跳べば！ ……と
べば？

脳裏に蘇るあの悪夢。私は……跳べない、昔とは違う……冷たいリンク、溜め息ばかりの観客席、同情の視線。

足元を滑らせ坂を転がり落ちる。

ぼんやりと空を見上げると、星は……消えたていた………

「無理……私……跳べない……」

一粒の涙と共に私の思いと希望は四散した……

「やっぱり……痛いのは……心……」

アンジユが呟く、あの時にきつと木野さんが止めた言葉、何で止めたか分からないけど……

「また……泣かせてしまった……俺は何て不甲斐無い教師なんだ……」

オシマイダーが苦しんでいる……先生の心が、ほまれちゃんの心が泣いている……

「さっさとプリキュアを叩きのめせ！ やれっつてんだよ！ 出来そこないが！」

先生のオシマイダーが苦しみ出す、先生。

「もう……オシマイダー！」

「終わっちゃいねええ！」

獣鬼の叫びと共にオシマイダーと獣鬼の拳がぶつかり合い爆風を生む。

「お前は教育者だろう！」

獣鬼が力強く踏み出しオシマイダーを吹き飛ばす。

「教え育てる者だろう！ そして！ お前自身も生徒に教えられ育つ者だ！」

私に出来る事、今、出来る事は。

「フレ！ フレ！ ほまれちゃん！ フレ！ フレ！ 先生！」

心から応援する事。

「オシマイダー！」

「勝手に絶望しているんじゃないねえ！」

私を庇う様に獣鬼がオシマイダーの攻撃を防ぐ、獣鬼が作ってくれたこのチャンス私

は想いをぶつけて見せる。

「ほまれちゃん、私まだ何だか良く分からないけどでも！」

一気にオシマイダーを駆け上がる、攻撃を避け掻い潜り、思いを口にする。

獣鬼が私の後を追って来る、私と同時にジャンプすると私に見える様に手を組んで見

せる。

手に足を掛け獣鬼の力も借りて更に高く飛ぶ、ありがとう獣鬼の思いも……私届ける

よ。

手を組み体を何度も回転させ私達の思いを届ける、思いを乗せた一撃を入れ地上に降りる。

「負けないで！ 負けちゃダメエ！ ほまれちゃん！ 先生！」

届いて私の思い、私の心。

「フレ！ フレ！ ハート・フォーユー！」

ベンチに寝かした先生が目覚めたのを遠くで確認する。

「アスパワワが戻ったみたいやな」

ハリーの言葉に一同が安堵の息を吐く、私達から少し離れて歩くほまれちゃん。

「先生を助けてくれてありがとう、それじゃあ、ここで……」

ほまれちゃんが寂しそうに笑って歩き出すのを私は見送れなかった。

「なんか、ごめんね……」

小さく呟いたほまれちゃんはとても小さく見え、私は胸を締め付けられる思いがした。

「ほまれちゃん」

足を止めたほまれちゃんに数歩近づく。

「フレフレ！ ほまれちゃん」

「止めて！」

「止めろ！」

ほまれちゃんと木野さんの声が重なる。

「はな、応援が痛い時もあるんだ……分かってやれ……」

ほまれちゃんは小さく木野さんに会釈をするとそのまま行ってしまった、私の頭に木野さんの大きな手が乗せられ優しく撫でられる。

「応援するのも優しいさだ、でも、そっとしてやるのも優しいさだ、今は察してやれ」
分かるけど、私は、私は……

「また明日」

ほまれちゃんが足を止める、私はもう一度思いを伝える。

「また、明日ね！」

届いたか分らない、でも声を掛けずにはいられない、だって私には夕日に照らされるほまれちゃんが泣いている様に見えたから……

第5話 心の傷を星に……

ほまれのセンス

昼休みに野乃に頼まれてビューティーハリ―って名前の店に入ったんだけど、一言で言うところ、何が酷いって、全て、統一感はないし、何がしたいかも分からない、店内を見て回ったら店の隅で木野さんが絶望的な顔をしていた。

「大丈夫？」

「一昨日まではこうじゃなかったんだ、でも昨日調律の仕事で一日空けて戻ったらこのありまさで……」

言い方に抑揚が無くなって少し怖いし、ちよつと言葉が出てこない、あ、また、大きな溜め息をついた。

「ハリ―のセンスが壊滅的なのはどうでも良い、でも、はなとさあやのセンスもこれってどう思う？　ねえ？」

「ヒイツ」

私を見たその瞳は光りが無くて余りの恐ろしさに小さな声を上げて私はその場を逃げ出した。

逃げて来た私は近くの椅子に座り大きく深呼吸をして落ち着きを取り戻していると、野乃と薬師寺が揃って私の前にやって来る。

「と言う訳で」

2人の声が綺麗に揃う、その笑顔に嫌な予感しかない。

「もう直ぐお店オーブン何だけど」

「何かが違うと思うんだ」

改めて店を見渡す、違うのは何かじゃないと思う……

「力を貸して！」

2人が私に迫って来る、必死の形相に少し引く、はぐたんの笑顔だけが救いかもしれない。

「どんなお店にしたいの？」

「え？ えつと……」

2人が戸惑いの声を上げるとハリーが唐突に割り込んで来る。

「そりゃ、ぎょうさんお客さんが来る店にしたいわな、お子様からマダムまでビューティーハリーがおしゃれにまとめませ」

ハリーの言葉に納得した、良かったね木野さん、野乃と薬師寺はコイツに言われるがままに陳列を手伝っただけで違和感を持っているよ。

「だったらお店のイメージズれていると思う」

「なんやて、めっちゃセレブ感出してるのに、何でや！」

うん、アンタのはセレブじゃなくて成り金ね。

「たとえば……」

ドンドンと指示を出し内装も外装も変えさせ展示も変えて行く、約1名が鬼気迫る形相で手伝ってくれたけど見ない事にしておこう。

「こんな感じでどうかな」

最後にマネキンの服の調整をしながら訊ねると野乃と薬師寺は同時に声を上げた。

「わああ、かわいい！」

「親しみやすいし、気軽に入れそう」

店内を見渡して薬師寺が弾んだ声を出す。

「ああ、くつろぐ……」

野乃が少しだらしなくソファアに座り、はぐたんも可愛い声を上げる。

「皆、お疲れ様、お茶を入れたから休憩にしよう」

そう言いながらトレイを片手に木野さんが歩いて来る、顔色も良くなっているし良かった。

「ハリーはそつちで休むのか？」

「わいはこっちでええ」

テーブルに座っているハリーの前にカップを置くと、木野さんは私達の座っているソファーにやって来て私達の前にもカップと小皿を置き、中央に大きめの皿を置いた。

「おー、カップケーキだあ」

野乃が喜びの声を上げる、けどちよつと気なる事が……

「あの、木野さんこのカップケーキは何処で買って来たんですか、この辺でこの様なカップケーキを売っているお店は無かった気がしましたが」

薬師寺が同じ事を考えて私の代わりに聞いてくれて助かった。

「これか、俺が焼いた、あ……手作り系無理だった？」

手作り……？ え？ コイツ本当に何者なの？

「前住んでた所でたまにカップケーキの専門店を手伝っていたんだよ、そこで覚えた」

「美味しいー！」

頬にクリームを付けた野乃が驚きの声を上げ、それを見ていた薬師寺もカップケーキに手をつける、私は何となく淹れられたコーヒーに口を付けた、コーヒーの良い香りが鼻から抜けて行く。

「おいしい……」

思わず漏れた言葉が少し悔しかった、カップケーキも美味しかったなんか悔しい。

「口に合ったようで良かったよ、はなコレをはぐたんに飲ませてあげて、赤ちやん用の麦茶買って来たから量は少なめで用意した、はぐたんも喉乾いてるだろう、多分ね」

麦茶の入った哺乳瓶をはなに渡すとはながはぐたんに飲ませる、一生懸命に飲んでる姿もきやわたん。

はぐたん用の麦茶まで用意しているのか、色々考えているんだなこの男、私に他にできる事は何だろうと考えていたらひとつ見つけた。

「ねえ、お店の写真、キュアスタにあげても良い？」

「是非！」

野乃と薬師寺が物凄く食い付いて来る、少し引いてしまいが隣で良く分かっている男がいる。

3人で笑いながら写真を取る、はぐたんもご機嫌で笑っている、皆で写真を確認してキュアスタにアツプ、実はこっそり私達の使ったカップを洗っている木野さんの写真も撮った。

アツプしてしばらくするとドンドンとお客さんが来て手伝いで大忙し、途中はぐたんがびつくりして泣いてしまったけど、ハリーの用意したタンバリンで何とか乗り切った、木野さんも手伝いをしていて接客が何気に上手でやっぱりちよつと悔しかった。

オープン大成功

直ぐに商品が売り切れてしまい、閉店となった店内で他愛の無い会話に花が咲いていると、また、飲み物が出される、今度のはガラスの耐熱カップに入った綺麗なルビー色のお茶、目の前に置かれると少し甘酸っぱい香りがした。

「木野さん、これは何て飲み物ですか？」

薬師寺がカップを持ち上げ香りを楽しみながら聞く隣で野乃はカップを底から覗き込み色を見て遊んでいた。

「コレはハイビスカスティー、疲れているだろうからこれが良いかなってね」

「木野さん、少し酸っぱいよ」

野乃が騒ぐので試しにひと口飲んでみる、酸味は有るけどサツパリしていて後味も良い、結構好みだ。

「きつかったらその蜂蜜入れてね、蜂蜜がはぐたんの口に入らない様にだけ注意して」
蜂蜜の入った小瓶を野乃の前に置くと嬉々として蜂蜜を入れる野乃、普通に飲んでい
た薬師寺も気になったのか蜂蜜を垂らしていた。

「楽しかった」

「ありがとう、ほまれちゃん」

「そうだね、輝木さんが来てくれなかったら、この店はどうなっていたかと……」

軽い感想に約一名が遠くを見ている、気持ちは分かるけどね、はぐたんもご機嫌で笑い声を上げていた。

「はぐたんも楽しかったって」

笑っているはぐたんに野乃が言葉を付け加える。

「私こそ……」

小さく呟く、こんなに心から楽しめたのは何時振りだろう……

「ねえ、ほまれちゃん写真撮って、ビューティーハリオープン大成功記念に！」

戸惑う私の手を取り強引に薬師寺の隣に座らせる。

「お願い、お願い！」

「分かった、分かった」

野乃のお願い位別にかまわないし、楽しかったのも本当、写真ぐらい良いかな。

「ほら、ハリと木野さんもおいでよ」

ハリに呼びかけながら木野さんを引っ張り無理やり座らせる。

「遠慮しとくわ、俺が入るとお前らが霞んでまうやろ」

ハリは来ないなら良いか、画面に全員が入る様にバランス良く配置する。

「じゃあ行くよ、セーの」

シャッターを切る小さな音が鳴り一息吐く。

「おおー、良い写真が撮れた」

「ほんまに、ハブにすんなや!」

耳に入った変な声に私は恐る恐るそちらを見ると一瞬何かが見えた。

「今何か、変な生き物が……」

「ははは、そなアホな」

絶対誤魔化してる、絶対何か居た。

「ほら、もうキュアスタに」

「本当だ、キュアスタ映える良い写真」

野乃と薬師寺が何か慌ててるけど、薬師寺の持っていた大きめのパッドを眺めるとそこに映っていたのは全員笑顔の写真……

「何か、自分のこういう顔久しぶりに見た、ねえ、何で今日私の事誘ってくれたの……」

怖くて聞けなかった事が思わず口から洩れた、戸惑いを見せる野乃に薬師寺。

「輝木さんは友達誘うのに理由が必要?」

私に問いかける木野さん、その銀色の瞳に見られると居心地が少し悪くなる。

「でも私、プリキュアに成れなかったんだよ……」

「プリキュアとかプリキュアじゃ無いとか関係無いよ、私、ほまれちゃんが好きだし仲良くなりたんだ」

真つ直ぐな野乃の言葉に瞳が私の心を驚掴む、私はその思いに応えて良いのか分からない、ゆつくりと立ち上がり歩き出す。

「ごめん、ちよつとはぐたんと散歩して来る」

私は逃げ出した、真つ直ぐ向けられる感情が怖い。

「待って！ ほまれちゃん」

野乃が引き止めるのも聞かずに私は歩みを止めなかった。

公園で

「そつとしといてやれや」

私がほまれちゃんを引き止めようとした時にハリーが私に声を掛けて来た。

「でも……」

ほまれちゃんは出て行ってしまった。

「はな、さあや、行くぞ」

振り返ると木野さんが何時も着ているジャケットを持っていた。

「何言うてんのや、この前お前がそつとしとけいたやろ、それに十分頑張っているやつに頑張れつてのは酷やぞ！」

ハリーが木野さんに食って掛かるけど木野さんはジャケットに袖を通している。

「ハリー気が付かなかったのか、輝木さん一瞬足止めたぞ」

「なんやて」

「それにな俺は頑張っている人間に頑張れつて言う様な事はしない、そばに居て常に思ってくれる仲間がいる事を教えてやるだけだ、行くぞ」

それだけ言うとう木野さんも出て行ってしまふ。

「木野さんの言う通りかも、このままじゃ……行こう、はなちゃん」

さあやちゃんが私の手を握って来る、何だか少し勇気が湧いて来る。

「あんなほまれちゃんやっぱり放っておけない」

私達は歩きだす、ほまれちゃんを励ます為に。

「やつと来たな」

外に出ると木野さんが壁に寄り掛かって私達を待つて居てくれた。

「どうして……?」

「はなが一番心配していると思ったからね、だから待ったんだよ」

思わず尋ねると木野さんが私に教えてくれる、その優しい笑顔に私はこんな顔で笑うんだと思いちよつと嬉しくなった。

引き留められたのも構わずに私はビューティーハリーから逃げ出した近くの公園のブランコで何となく時間を潰していた。

「何で私こうなんだろう……みんな私の事心配してくれている、分かっているのに、あの頃の私に戻りたいな」

頭に浮かぶのは常にスケートの事、こうなる前の自身に満ち溢れ未来を信じでリンクに立っていた私。

「はな、応援が痛い時もあるんだ……分かってやれ……」

「楽勝だね、な、輝木さん」

ふたつの言葉を思い出す。何なんだろうあの木野つて男、知った様な口をきいて……そう言えば褒められたの久しぶりだな……

キィと金属の擦れる音がしてそちらを振り向くと野乃に薬師寺、そして木野さんが

立っていた。

「ごめん、来ちゃった」

そう言うの野乃は笑顔を浮かべており薬師寺と木野さんも笑みを浮かべていた、自然な動作で隣のブランコに座る野乃。

「ごめんね……」

小さく謝った私の言葉に3人が驚いた顔をする。

「何が？」

「応援してくれたのに、きつい事言っちゃった」

脳裏をよぎる昨日の帰り際、木野さんが止めなければ私はどんな酷い事を言っていたか分らない。

「私も、ごめん」

野乃はそう言うどブランコを漕ぎ出した、油の切れた金属の擦り合わさる音が聞こえ少し懐かしい気分させた。

「何て言葉をかけて良いか正直分からなかった……もつとイケてる言葉言いたかったけれど、心がうーって成ってフレフレしか出来なかったの」

まるで私に懺悔するかのよう言葉紡ぐ野乃、漕いでいたブランコを足で急制動を掛け止める。

「私、ほまれちゃんみたいに成りたい、美人でカッコよくて大人で……なのに、お子ちゃまだよねー」

ブランコの鎖を掴み背中を反るその姿に私は不思議な気分になった。

「変なの、私はアンタみたいに成りたいのに……」

常に前向きで何時もキラキラ輝いている、私と違い毎日を精一杯生きているその姿に憧れる。

私の言葉に驚いたのか野乃がブランコから滑り落ち尻餅を着く、私は野乃を起こす為にブランコから立ち上がると、手を伸ばしながら自分の気持ちを正直に話す事にした。
「明るくて素直でみんなアンタみたいな子好きでしょう」

差し出さした手を取った野乃を引き上げると、野乃は少し照れらように頬を染める。

「そんな事ないよ、おっちょこちよいだし、グイグイ行き過ぎて引かれちゃうこと多いし」

おどけながら話す野乃の姿が面白かったのかはぐたんが嬉しそうな声を上げると、野乃は慈愛に満ちた笑顔をはぐたんに向ける。

「はーぐたん」

一生懸命に手を伸ばしていたはぐたんを抱っこしあやす野乃。

「全然そんな、みんなの好かれる方じゃないから、だけど私成りたい野乃はながあるの、

だから頑張る」

私の小さな言葉に精一杯の言葉を紡いでくれた野乃、はぐたんを抱っこして私に笑いかける笑顔はやっぱり眩しくてキラキラと輝いて見え、私の心をざわめかせる。

「私ほまれさんの事が好き、前よりずっと好きになった、私やはなちゃんに出来ない事がほまれさんには出来る」

真つ直ぐな視線を向けて来る薬師寺、私はその瞳の輝きに息を飲む。

「輝木さん、君が思っているよりも君を大切に思っている人達が居るんだ、その事だけは心に留めて置いて欲しい」

優しい笑みを浮かべ木野さんが私に伝えて来る、野乃に薬師寺と木野さん皆が私を大切に思ってくれている……怪我をした私と常に気にかけてくれた先生、私は何も見ようとして居なかったのかもしれない。

「ビューティーハリーも良い感じにオープン出来たしな」

ハリーが照れくさそうに物陰から出て話しかけてくる。

「ほまれさんに出来ない事が私達には出来る、私達きつとすごく仲良くなれる」

「ほまれちゃんはどうな自分に成りたいの？」

「3人で笑いながら話している姿は素敵だったよ」

野乃も薬師寺も木野さんもどうしてこうも私の心を揺さぶるの、私は恥ずかしくなっ

てさつきとは別の意味で逃げたくなる。

思わず走り出しハリーに抱っこ紐を押しつける。

「やめてよね！ そのほまれちゃんつてのなんか恥ずかしい、やめて」

皆してポンポンポンと恥ずかしい台詞並べて、私の方が恥ずかしくなって思わず誤魔化してしまう。

「やっぱり、ほまれさんじゃない？」

「いつそ、ほまりんとか？」

「いや、ほまほまを押しね」

薬師寺は良いとしても、オイ、野乃に木野、今何て言った？

当事者の私を放っておいて、好きかって言いだす三人に文句を言おうとした時に、空気が破裂するような音がしたと思ったら一瞬突風が吹いた。

デイスクアニマル

ボンツと言う音と共に木野さんの居た場所に小さな土煙が起きると、何かがぶつかり合う音が私達の後ろから聞こえた。

「何の用だ！」

木野さんの鋭い声に私達は慌てて声の方を見るとクライアス社の男と木野さんが腕をぶつけ合い互いに一歩も引かない体制に成っていた。

「別にお前らにはまだ用事はねーよ、俺ちゃんが用事があるのは、輝木ほまれちゃん、君だ」

「この状況でやらせると思っているのか」

木野さんが更に押して行くとクライアス社の男はいやらしい笑いを見せる。

「お前が俺ちゃんに攻撃してくるのはお見通しさあ、こつちには優秀なバイトちゃんがいるからなあ」

「バイトだと……？」

木野さんの言葉にクライアス社の男は何も答えずにいやらしい笑いを浮かべていた。

ほまれちゃんの胴体に紫色のリングが現れ拘束すると空中に浮かびあがる。

「お前には関係ねーよつと、輝木ほまれちゃんはありがたく貰って行くから」

言葉と同時にほまれちゃんもクライアス社の男も消えてしまう。

「ほまれちゃん！」

「みんな待て！」

何処に消えたか分からないけど捜さないと、走り出そうとした瞬間に木野さんに引き留められる。

「早くほまれさんを探さないと！」

さあやちゃんが木野さんに詰め寄る、木野さんは腰から銀色の円盤を何枚か取り出す。

「捜す為にも少し待て、手数を増やす」

木野さんは何時も変身で使っている音叉と開くと円盤を弾く、すると円盤に色が付いて変形していく。

「茜鷹！ 瑠璃狼！ 緑大猿！ 黄蘗蟹！ 鈍色蛇！ 輝木さんの捜索だ、見つけたら

俺達に連絡しろ！ 行け！」

呆然とする私達を置いて鷹が空を翔け、狼と蟹と蛇が大地を走り、猿が木から木に跳び移って行く。

「木野さんアレって何？」

「説明は後、ディスクアニマル達が見つつけてくれれば俺達に連絡が来る、これでバラバラに探せるだろう」

木野さんの言葉に顔を見合わせた私達は四方へとほまれちゃんを捜す為に分かれて走り出した。

公園で恥ずかしいけれど少し幸せな時間に浸っていた私はいきなり現れた軽薄そうな男にさらわれ、次に気が付いた時には私は建物の縁に立っており、下から吹き上げて来る風に恐怖心が煽られていた。

「そこからここまでジャンプしてみればあ？ やっぱり無理？ だよねえ君は一度だけの失敗と知っているかも知れないけれど、身長が伸びてから一度もジャンプに成功して無い」

男の言葉が胸に突き刺さる、皆が分かっているにも私に言わなかった事、言えなかった事、高さや煽って来る風よりも男の言葉が怖い。

「それが、真実でしょう……」

男の言葉が黒い水のように私に入り込んで来て私の心を蝕んでいく。

「私はもう跳べない……それが……真実……」

「そう、もう二度と輝けない、お前に未来は無いんじゃない」

私に……未来は無い……それが、真実……胸が……痛い……

たすけて

ほまれと八雲

木野さんの出した不思議な動物？ に先導され私は少し遅れて皆の元に合流した。

「さあやちゃん！ 木野さん！」

私の声に振り向く2人、木野さんの表情が厳しい物に成っている。

「この上らしい、皆行くぞ」

木野さんの言葉にうなずきビルに入ろうとしたその時にほまれちゃんの叫び声が聞こえてくる。

立ち上がる禍々しい煙が空で渦巻いて形をなして行く、私とさあやちゃんは同時に声を上げた。

姿を現したオシマイダーを見上げ更に険しい表情の木野さん。

「居た！ 輝木さんだ！」

木野さんの指す方を見るとビルの縁に立ちトゲパワワを溢れさせているほまれちゃんが視界に入る。

「ほまれちゃん！」

「ほまれさん！」

ぐったりとする姿に私とさあやちゃんが叫ぶけど声は届かなくて、私は拳を握りしめた。

「はな、さあや、すまないが2人でオシマイダーの相手を頼みたい」

唐突な木野さんのお願いに思わずさあやちゃんと顔を見合わせる。

「分かりました、でもどうして……」

さあやちゃんが少し不安そうに木野さんに声をかけると、木野さんは振り返り私達を安心させる様な笑顔を浮かべる。

「輝木さんを助けに行つて来る、はな、予備のプリハートを貸してくれもしかすると……」

木野さんはそこで言葉を飲み込むと眉間にしわを寄せ難しい顔をした。

「木野さん……」

小さく呟くさあやちゃんを横目で見ながらも私はプリハートを木野さんに差し出した。

「木野さん、オシマイダーは私達が何とかする、だからお願い、ほまれちゃんを救つてあげて」

「任せろ、必ず救う」

私からプリハートを受け取った木野さんの表情はさつきまでの険しさは無く堂々と

して、少し格好良かった。

「はぎゆう」

はぐたんが声を上げると木野さんははぐたんに優しく笑いかける。

「分かっているよはぐたん、ほまれお姉ちゃんの事を助けてくるよ、直ぐにほまれお姉ちゃんが抱っこしてくれるから良い子で待っていてね」

木野さんはプリハートを握り直すと、変身もしないで屋上に向かってビルの壁を蹴り上がって行った。

「思った通り、でっかい夢ほど失った時の絶望がでっかいじゃん！」

「絶望などさせない！」

力強い声が聞こえる、この声は……お節介だなあ木野さんは、もういいよ私は……そ

れにどうせ……

「お前いい加減にするじゃん！　メーワクなんじゃん！」

戦っている、私を付き離した男と手を伸ばす男が、何でそんなに必死なの？　放つて置けば良いのに……

「未来を失い、絶望した奴を救う価値なんて無いじゃん！」

「黙れ！　ほまれの価値は、ほまれしか知らないんだ、貴様如きが勝手に語るな！」

木野さんが相手を殴り飛ばすと物凄い音を立てて相手の男が壁に叩きつけられる。

「たとえ今が苦しくたって、何時かこの日の苦しみをさえ楽しく思いだせる日が来るんだ、ほまれは必ずもう一度宙を舞う！　輝きを取り戻す！　未来は絶対に無くならない！」

「お前らも、プリキュアも、この世界に希望も未来もねーんだよ」

男はそれだけ捲し立てると消えてしまった。

「くそつ、逃がしたか……いや、エール達の方に行つたのか……」

エール？　そっかプリキュア戦っているのか、じゃあ何で木野さんここに居るの……

「ほまれ！　輝木ほまれ！　聞こえているか！　たったひとつの失敗を決定的な失敗と勘違いするな！　どんなに苦しくて救いが無いと思つても、それを変える道があるんだ

！　聞こえているか！　ほまれ！」

何も知らない癖に……私はもうどうせ……

「ほまれ！ 俺の事なんて信じなくて構わない！ だが下にいるはぐたんだけは信じてやれ！ お前を見つけてからあの小さな体ですつとお前に呼びかけている、はぐたんの思いは忘れるな！」

はぐたん……はぐたん……泣いてるの？ はぐたん……

「泣かないで……はぐたん……でも、ごめん、もう私に未来は無い、私はもう跳べない」

「ほまれ！ 他人の眼なんて気にするな！ 言いたい奴には勝手に言わせておけ！ だがなほまれ！ ほまれが今、今ここに居る事が大切なんだ、帰ってこい輝木ほまれ！」

「怖い……」

私……居るだけで良いの？ ……でも……怖い……3人の言葉が心を巡る……

「私やほなちゃんに出来ない事がほまれさんには出来る」

「ほまれちゃんはどうな自分に成りたいの？」

「ほまれは必ずもう一度宙を舞う！ 輝きを取り戻す！ 未来は無くならない！」

私に出来る事、成りたい私、こんな私を信じてくれる人が居る……思いだすのは輝いていた自分……

「私は、私は……もう一度飛びたい……もう一度輝きたい！」

聞こえるよはぐたんの声、ありがとうねずっと応援してくれて、はな、さあや、ハリー、私の為にありがとう

もう一度跳ぶよ私……木野さん凄く必死な顔……バスケの時も助けてくれたね、この間も必死に叫んでたね、今も信じてくれたね、一度宙を舞うって輝きを取り戻すって、私の未来は無くならないって怖いけどもう一度手を伸ばしてみるよ……

「心が……溢れる！」

「来い！ ほまれ！」

木野さんの叫び、澄んだはぐたんの声、はなとさあやの思いが私を熱くする、私は未来を取り戻す。

「跳ぶのが怖い、応援される事も、けど……もう自分から逃げない、私は私の心に勝つ」
ビルから跳んだ私を木野さんが受け止める引き寄せられた、力強い腕に引き締まっているのが分かる胸板、私の頬が木野さんの胸板に触れた時小さな違和感を感じ見上げる

と凄く優しい笑顔をしていた、頬に熱を持ち慌てて離れる。

「お帰り、輝木さん」

私の頭を撫ぜながら「お帰り」と言う木野さんにムツとする。

「ほまれで良いよ、さつきまで散々名前で呼んだくせに……」

私は口を尖らせたながら言い放ち、恥ずかしさを誤魔化す為、頭を撫ぜる木野さんの手を払いのけた。

呼び方

「私、はなとさあやを助けたい、このクリスタルにその力があるのなら、私はプリキュアに成りたい！」

私の本当に思い、寄り添ってくれたあの2人の力に成れるのなら私は……

「ほまれ、今の高揚感に酔ってプリキュアに成りたいのなら反対だ」

木野さんの冷たい声に鋭い視線、私はその視線に耐えながら思いをぶつける。

「そんなんじゃない！ 私は助けたいんだ、はなをさあやを、ずっと気にかけて手を伸ばし続けてくれた大切な人を助けたいんだ、それにもう先生や私みたいな犠牲者を出したくない！」

「もしかすると、スケート以上の辛い目に合うかも知れない、それでも自らの意思で戦いを選ぶのか、ほまれ」

目を瞑り大きく深呼吸をしながら考える、木野さんの言う事は分かるでも私の心は決まっている。

閉じた目をゆっくりと開け木野さんの瞳を見つめる、銀色の瞳に映る私はまるで問いかけてくるようだった。

「それでも私は心は変わらない、私はもう逃げないって決めたんだ」

感情を感じさせない銀色の瞳に見つめられ息を飲む、でも絶対に逸らさない絶対に逃げない。

銀色の瞳が揺らぎ優しい光を湛えると木野さんは小さく息を吐いた。

「分かった、それがほまれの思いなら信じるよ、これがプリキュアへの招待状だ、自分の意思で受け取るんだ」

差し出されたピンク色のアイテム、私は手を伸ばし受け取ると手の中で温かさを感じる、握りしめ胸に抱く。

高鳴る心、まるでリンクの前に立つ前の高揚感、大丈夫、私は……跳べる。未来へ輝く！

「ミライクリスタル！ ハート・きらつと！」

「は〜ぎゅ〜・ぎゅ〜・ぎゅ〜」

「輝く未来を抱きしめて！ みんな輝け！ 力のプリキュア！」

「キュアエトワール！」

体が軽いとこまでも跳べそうな心地良い気分、力が溢れてくる、隣に並ぶ気配を感じ横目で見ると木野さんも変身していた。

「行くぞ！ キュアエトワール！」

風を斬るふたつの音が聞こえる。

音の方に顔を向けると獣鬼ともう1人……プリキュアが飛んできた。

綺麗な着地をすると2人が私達の方に振り返る。

「新たな仲間、キュアエトワールだ」

獣鬼の紹介にキュアエトワールが魅力あふれる笑顔を見せると、いきなり表情を引き締めオシマイダーに立ち向かう。

「フレ！ フレ！ ハート・スター！」

輝く流星がオシマイダーを捕え動きを止める。

「キュアエトワール！」

名前を呼びながら私とアンジュはエトワールに近づくと凛とした表情で私達に話し

かけてくる。

「この怪物は私が倒す！」

「違うだろ、エトワール。お前は1人じゃない」

エトワールの言葉に間髪いれず獣鬼が突っ込みエトワールの頭をコツンと叩く。

「そうよ、私達仲間でしょう」

「ここからは一緒に力を合わせて」

「俺達は全員で戦うんだ、それを忘れるな」

私達の言葉を聞いて一瞬ポカンとした後に微笑みながら頷くエトワールはとても綺麗で魅力的だった。

オシマイダーがハート・スターの拘束を引き千切ると翼をはやして空へと舞い上がる、それを追う様に私達4人も高く飛ぶ。

最高点に達した所で私とアンジュ、獣鬼が手を組み足場を作るとエトワールが足をかきその瞬間に大空高くエトワールは飛翔した。

「跳べ！ キュアエトワール！」

私達の思いを乗せ天高く空を舞うとエトワールは体を錐揉み回転させオシマイダーに流星の様な蹴りを

入れそのまま地上へを舞い戻る。

私はその隙を逃さずに力を解放する。

「フレ！ フレ！ ハート・フォーユー！」

はぐたんにエトワールのミライクリスタルの力を与える時に何故が獣鬼は少し複雑な顔をしている。

今回だけじゃなくて毎回何故か微妙な顔をしているんだよね……

「どうしたの獣鬼？ 何か心配ごと？」

私が尋ねると獣鬼は小さく首を振る。

「別に何でもないよ」

力を貰ってご機嫌なはぐたんに近づくと獣鬼は笑いながら話しかける。

「はぐたん、ちゃんとほまれお姉ちゃん助けて来たからね」

ほまれお姉ちゃんか……良いなあ……はなお姉ちゃんって呼んで貰いたい。

笑い声を上げるはぐたんに皆が幸せな気分には浸っているとほぐたんがエトワールに一生懸命に手を伸ばしそれに気が付いたエトワールがほぐたんを抱っこする。

「はぐたん、これからよろしくね」

陽もかなり傾き夕闇が迫る中、私達はビューティーハリーから家に帰る為外に出る。

「それじゃあ、また明日ね。ほまれちゃん、じゃなくて」

言葉を切った私に皆が不思議そうに私を見てくる、私は一度皆を見渡すと大きく息を吸う。

「また明日ね、ほまれ、さあや！」

言い直した私に驚いた顔のほまれにさあや、少し頬を染めた2人に笑いかける。

「ええと私も、これからもよろしくね、はな、ほまれ」

いつもより少し弾んだ声で私達を名前で呼ぶさあや。

「あはははは、呼び方なんて何でも良いのに」

「いやあ、大事じゃないスか」

笑い声を上げたほまれに少しおどけて返事をする、ほまれの表情が今まで見た事無いぐらいに和らぐ。

「けど、嬉しい……」緒に居てくれてありがとう、さあや、ありがとう野乃はな」

「え、野乃はな……」

何故か私はフルネームで呼ばれ目を丸くしながら思わず自分の名前を復唱した。

「いいじゃん」

「そう？」

「野乃はな、イケてる」

ほまれに褒めて貰った私は跳んで喜んだけど、調子に乗り過ぎてしまい足を滑らせてお店の前の川に落ちてしまった。

慌てて駆けて来た皆に私は声を上げて笑うと皆も笑う、ちよつと冷たいけど少し楽しい。

笑いながらも少し呆れた感じで木野さんが私に手を差し出してくれたので掴むと物凄い勢いで引っ張り上げてくれた。

「ありがとうね、木野さん」

「八雲だ」

「え……」

私達に向けられたその優しい笑顔に一瞬考えが纏まらず、少し間の抜けた声を出してしまふ。

「大切なんだろ呼び方」

「そうですよ、改めてよろしくね、八雲さん」

真つ先に返事をしたのはさあやだった。

「ま、どうしてもってなら呼んであげる、八雲」

ほまれが少し悪い笑顔で名前を呼ぶとさあやと2人して私を見つめてくる。

「え、え、よ、よろしくね、八雲……さん？」

「はな、語尾上がってる」

戸惑いながら挨拶をした私に、ほまれが笑いながら突っ込みを入れると、途端に笑い声に包まれる。

皆が楽しそうに笑っている、それだけで私も楽しくなり皆としばらく笑い合った。